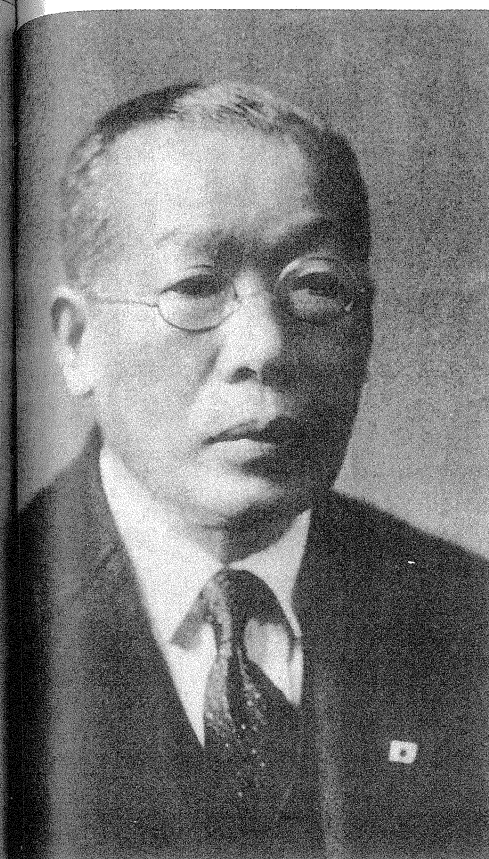


終生、新渡戸稲造を師と仰ぐ 北海道の中等教育を確立した

山田幸太郎



人づくりの人脈

明治二年、開拓使の設置により北海道の開拓が始まった。そのための人材養成は札幌農学校の設置によって本格化するが、当初の卒業生の一人、新渡戸稲造（二期生）は、母校教授から雄飛し世界に貢献する。

新渡戸稲造は、明治二四年に北鳴（ほくめい）学校を創設、翌年本道初の私立中学校となる。これに刺激され、明治二八年本道に片立の札幌中学校（現、札幌南高等学校）が創設される。しかし、草創期の校長に人を得ず、道庁長官河島祥は、愛媛県大洲中学校長の山田幸太郎に

白羽の矢を立て来道を懇請する。これにこたえ山田幸太郎は明治四一年、第七代校長として片立札幌中学校に赴任することとなったのである。

大洲といえば緒方洪庵、佐久間象山の弟子で、箕作阮甫に師事した武田斐三郎の出身地である。武田斐三郎は幕末に箱館奉行支配諸術調所を経営し、洋学を教授することにも、航海術及び測量の實際を指導し、沿海州まで航海した。前島密、井上勝らはその教え子である。こうした蝦夷地の夜明けを山田幸太郎が熟知していないはずはなかった。

山田幸太郎は、明治四年に金沢藩（前田藩）士山田丹治の長男として、金沢市上本田町に生まれた。明治一三年に父は実業を志して来札、翌年家族とともに幸太郎も来札した。志して札幌農学校に進み、明治二七年に農学科を卒業した。



行啓記念植林地に標木建つ（明治44年10月）

その間山田幸太郎は、新渡戸稲造から農学、

殖民学、英語等を学び、これを契機に、終生新渡戸稲造を指南としたのである。これについては、新渡戸稲造の後継者で、北海道史研究の第一人者であり、山田幸太郎から直接教えを受けた高倉新一郎は、校友会誌「氷魂」の「ソクロウをかけた」の中で、

「（上略）先生（山田幸太郎）は札幌農学校時代親しく新渡戸先生に習はれ、特に目をかけられたらしく、新渡戸先生に傾倒して居られた。新渡戸先生は人も知る博学な方で、その知識をもつて、平易にしかも新しく、世界人となった日本人の踏み行く道を説かれた。山田校長の修身も実はこの新渡戸先生の感化だったのだと知った」と記述している。

山田幸太郎が教育の道を歩んだのは、新渡戸稲造の『穀を作る』は一年の計、樹を植えるは十年の計、人を育つるは百年の計のさとしによるといわれている。

山田幸太郎は札幌農学校卒業後、丸亀中学校、福岡伝習館を経て、大洲中学校長から札幌に錦を飾ることとなった。そして彼は、以後昭和一二一年まで札幌中学校、のちの札幌第一中学校長として学校の経営に情熱を傾け、高い評価を得た。北海道ではこの時期、「男子校の山田幸太郎」と、その令名をたたえたい。

札幌一中の経営

日露戦争後に、開拓の遅れから起こった札幌中学校の騒ぎのように際して、山田幸太郎は、部下教員の心をつかみ、生徒の気持を肌で感じ、みじんも高圧的態度をこらさず、師弟一体となって事に当たり、校風を一変させたという。校長としての山田幸太郎の学校経営は、人事を公平に、派閥をつくらず、人間関係がうまくいくように心がけた。反面、実力があれば抜てきをしたので、在任中多くの校長を輩出した。このため部下教員は安んじて長年同校に職を奉じたという。

また、いうまでもなく山田幸太郎の学校経営は、人の和をモットーにしていた。その真髓は、校長室を埋めた万巻の書にあり、これを読破し、休日といえども机に向かいその心奥を究めた。

朝会をはじめ各種の集会には、ろうろうとしたさびのある声に生徒たちは感服し、しびれたのである。そして、学校を社会に処する修養の場としてとらえ指導に当たった。

その一例として、遅刻する生徒があれば校長室に迎え、ときには人生を論じ聞かせるので、叱られるよりもっと身にこたえたという。『よく学びよく遊ぶ』という古今東西の金言

を信じ、学業に精励せしめる反面、積極的に

著名な人を招いて講演をお願いする。また、体育、スポーツを奨励した。その結果、いろいろな競技で全道はもちろん全国に覇を唱えることが多かった。

山田幸太郎の教育訓は、次の歌にうかがい知ることができ。

五とせのゆきを 学の庭につみ

春のひかりをあふぐけふかな

(『氷魂』から)



第28回雪戦会北軍攻城（大正14年）

学校行事としては、明治四二年から全校生徒による討論会を始めたり、四五年からは校内マラソンを始めたりした。特に、雪戦会は北鳴学校の伝統を継承するもので、明治三一年一月を第一回とし、以後今日に至っている。校庭の雪を踏み固め、これを積み上げて城をつくり、肉弾相打つ激闘の末、頂上の旗を奪い合う。しかし戦い済んで翌日になれば敵味方を忘れて勉強にいそしむのである。

この雪戦会は、明治三九年一月、文部省澤

いしづみによって永遠にその初志を残そうとしている。

万人感化

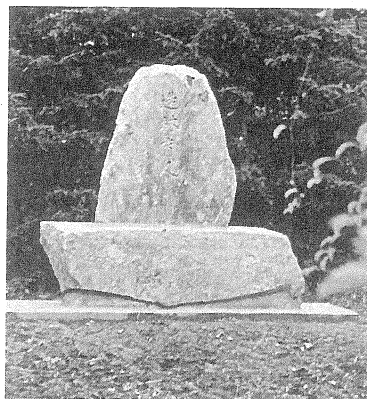
山田幸太郎は若いころから吉田松陰の思想に傾倒し、佐藤一齋、本居宣長に心酔し、陶淵明の詩に感激した。また欧米の著名人にも心をはせた。これがあらゆる場に、にじみ出ていた。

この人徳をたたえべく開校三八周年記念の昭和八年に、山田幸太郎勤続二五年記念の胸像を建立した。これは退職四年前のことであった。

札幌中学校時代の校舎は札幌の北部に位置したが、大正一一年に南部の現在地に新築移転した。その後、同校敷地南部に校舎を新築、現在（札幌南高等学校）に至っているが、その校門近くに山田幸太郎の胸像が建立され、登・下校する生徒を見守りほえている。

この胸像は、戦時中供出され、昭和五年に再鑄造されたもので、くしくも除幕は山田幸太郎の死去する四年前のことであった。

山田幸太郎は、昭和二年八月二八日、八四歳で永眠した。



「造林育人」山田幸太郎顕彰碑

御政太郎普通学務局長が演英の際、日本の教育に関する講演の一資料としてこの写真を持ち、紹介したことが「ロンドンタイムス」に掲載されたのがきっかけで、世界的に一躍有名になった。また、昭和九年一月にはラジオによる全国放送で雪戦会の実況が放送された。当時、多くのほかの学校も始めた雪戦会が長く続かなかつたのに、この学校が伝統を守つてこられたのは、帰するところ生徒間の和があつたからで、それが当校の誇りでもある。

山田幸太郎の校長時代にあつた、台覧授業を校長として非常に喜び、これを記念して記念植樹を企画し、その地を豊平町有明（現、札幌市豊平区有明）に求め二百数十町歩にカラマツを植え、土地によつてはトドマツを植えた。この記念植樹は今も事々として空をおおい、全国有数の学校植林地になっている。

この学校林こそ山田幸太郎の人生訓そのもので、今は林地内に「山田林道石碑」と、「造林育人」の山田幸太郎顕彰碑を建立し、その

女性の自立と「教育即生活」を説いた

柴田 やす



柴田学園創設者 柴田やす

裁縫塾から短期大学開設までの苦闘と栄光の生涯を、開学式の壇上で閉じた学園の母

一 アザミの花

日露戦争の勝利で、首都東京が興奮に沸く明治三十九年六月。神田橋の東京府家事科教員伝習所に通学する女性がいた。当時流行のエビ茶のハカマにヒサシ髪スタイルは、一見普通の女学生だが、実はこの柴田やすは二六歳で二児の母、わけがあつて青森市からはるばる上京していったのだった。

やすは青森の商家の妻だが、夫が家業を急けて将来の見込みが立たず悩んでいたところ、

妹がアメリカで働く同郷人と結婚し東京で渡米の準備をするため、やすが付き添いで出てきたのである。そこでいつそ東京で自立して娘たちと暮そう、そのために家事科教員の資格をどうと決心していたのである。

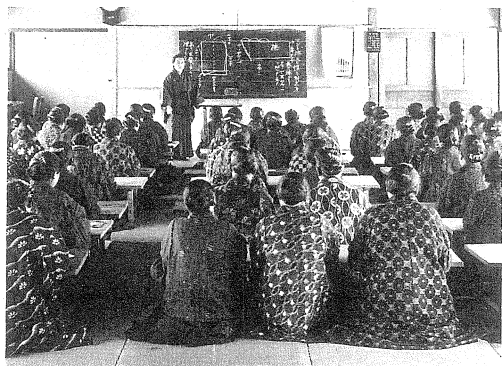
娘時代から裁縫が得意だったやすは、目新しい東京風俗でこれからは洋裁の時代になると直感し、洋裁の技術も修得しようとしていた。そこで伝習所で学ぶ余暇に、築地の外国語学校の洋服専攻科や実用女学校技芸部で聴講したり、いろいろな講習会に出ては洋裁製図、袋物、帽子類、裁縫教授法、また国語、作文、礼法などまで寸暇を惜しんで懸命に学んだ。

こうしてやすは四一年に東京府板橋の志村小学校の訓導になった。そのころやすの寄宿先を訪ねた知人によると、やすは机の上にアザミの花を一本差していたという。たくましく生き美しく咲く野の花こそ、不運な生い立ちと結婚生活を自力で打開しようとするやすの姿だったのである。

二 異色の裁縫塾

しかし、やすは程なく婚家の事情と、残してきた二人の娘たちに心引かれて青森に帰った。小学校教員で再出発したが、四二年の青森大火で一家は被災し、また長女は一三歳で

病死した。傷心を忘れ、出直しのために、汽車で一時間ほどの弘前市に転住した。大正三年一月、やすが三四歳の時である。やすにとつて弘前は父祖の地であつた。生家の今村家は代々津軽一〇万石の城下弘前で、



洋裁の授業風景（大正13年）

藩の御用を勤めた富商。明治維新の時に家産が傾き、一二代目の今村儀三郎は青森に移った。やすは明治一四年、その長女として生まれたが、父は早死してやすは再婚した母の許で育った。

弘前は三〇〇年の歴史と、教育文化の伝統をもち、明治中期に開校した県立女学校とそれより古い私立女学校が、女子教育の名門校であつた。どちらも普通教科に力をそそぎ、

家事裁縫の実技指導は十分ではない。卒業しても花嫁修業のため、町の裁縫塾に通う有様であつた。

そこでやすは、東京で修得した新しい洋裁技芸と教員の経験を生かして裁縫塾を開き、世間の要望にこたえようと、借家の軒先に和洋裁縫手芸教授の看板を出したのである。和洋・手芸というまだ目新しい言葉にひかれて、すぐに一〇数名の塾生が集まり、やすの目先のきいた試みは成功した。

やすはいつも品のよい見だしなみで、苦勞人だけに塾生をいたわり、自分で柴田式裁縫と呼んだ合理的な仕立て方を懇切に教えるので、娘たちの上達が早いことも町の評判になった。数年後には借家住居から現在柴田学園本部のある一画に独立し、将来の展望を画つたのである。

三 教育を生活に生かせ

やすは日進月歩の東京での体験から、これからは地方の女性たちも時代の進歩にめざめ、本来の天分を生かしながら社会的にも自立できなければならぬ。そのためにエリート教育

の機会に恵まれない多くの娘たちの教養知識を高めてやることを、自分の仕事にしようという信念を固めた。

そのため塾生には修身、国語、算術、家事の科目から、習字、茶の湯、生花まで手ほどきをして、嫁入りまでに一通りの教養を身につけさせたのである。やすのこの方針に力強い協力を与えたのは、やすが「三山先生」というやまのひたむきな努力が実つて、三年目の大正一二年に各種学校として認可され、予科・本科・研究科合わせて一〇〇名定員の私立弘前和洋裁縫学校となつた。いまま柴田学園はこの時を創立記念の年としている。

大正九年四月から、私立柴田和洋裁縫学校と改称し、校長として特色ある私学教育を進めた。開校の朝、やすは前庭の片隅に二ワウルシの小さな芽を見つけ、「きょうからはお前と一緒にのびていこう」と語りかけたという。やすのひたむきな努力が実つて、三年目の大正一二年に各種学校として認可され、予科・本科・研究科合わせて一〇〇名定員の私立弘前和洋裁縫学校となつた。いまま柴田学園はこの時を創立記念の年としている。

晴れて公認された和洋校の志望者は定員を超えた。やすはかねての教育信念に基づき、實際生活に直結した家事裁縫の実技と勤労精神にこそ、女性の社会自立のかなめがあるとして、生活の中に教育を生かせ、「教育即生活」の目標を高く掲げた。これが現在も将来も動かぬ学園建学の精神である。

運動場も整備された。これに先立つて制定した校訓には、清浄心・品性向上・和顔愛語・親切・快活優雅・長幼の序・勤儉など、日ごろの訓育方針を明示している。

創立一〇周年に当たる八年には高等師範科が新設されて、その卒業生には裁縫科中等教員免許状が無試験検定で与えられる東北・北海道有数の学校になり、地元の子の向学心を高めることにもなった。秋の校舎増築落成を兼ねた記念式典で、五三歳になったやすは「一〇年一日のごとく子女の教育に当たり、全校あげて家庭的な和合を流露したことは、感慨胸にあふれ感涙にむせぶのみである」と、多くの山坂道を越えてきた心情を述べた。

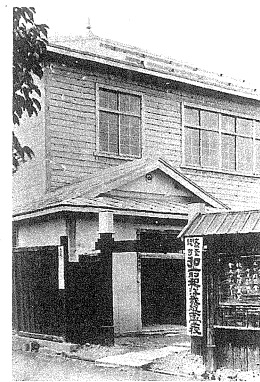
弘前は軍都であつたため、戦時下には全校あげて留守家族への奉仕活動、軍の被服修理、食糧増産などに努めた。やすは「柴田式改良モンペ」で特許をとり、はきやすくスマートな婦人戦時服として、生徒にも一般の婦人たちにも広く愛用された。

六 短期大学開設

終戦の翌二一年、やすは財団法人柴田学園を設立して理事長となり、新時代の方向に堅実な対応を進めた。この年東北女子専門学校（生活科・被服科）を開設し、まもなく六・

四 百難心動かず

やすの指導はきびしく、裁縫仕立ては少しの狂いも許さず、すぐハサミを入れてほごききつちりと要点を教えた。農村地帯からの生徒は学校に寄宿し、校長一家と家族同様の生活の中で、日常のしつけも自然と教えこまれ



昭和5年の新校舎

た。誠実で気立てもよく、実技に強い卒業生をみて、嫁にもらうなら和洋校から、という世間の評価も高まった。そして、隣県秋田地方からの入学者も、毎年ふえるようになった。まだ寒さきびしいある年の春、生徒募集のため秋田北部に風邪の熱をおして出かけたやすが泊った旅宿で、床の間の掛け軸が目につ

三制が公布されると柴田中学校・柴田女子高等学校を発足させ、中学から女専までの生徒一三〇〇名、教職員六三名の総合学園となつた。卒業生もすでに七五〇〇名を数え、驚く



グライダーの操縦かんを握る活動的な柴田校長（昭和17年ごろ）

ばかりの発展である。また市内の旧軍隊の敷地と建造物を大蔵省から払い下げをうけ、今後の学園拡張の基盤も残している。

二四年には時代の要請をみて栄養士養成の

いた。それは「百難心動かず、千辛気益々振ふ」と書かれた文豪大町桂月の詩句であつた。やすはこの言葉に励まされ、くじけてなるものかと勇気を奮い起こしたと、のちにたびたび述懐している。

学校増築のため後援会の募金活動が始まり、やすも率先して事に当たつたが、時には売名者呼ばわりをされて悔し涙をのむこともあつた。そうした折りにくじけそうな心を支えてくれたのが「百難心動かず」の言葉だつた。昭和三年には実業学校令による青森県最初の私立女子中等学校に昇格、裁縫塾から一五年で高等女学校と同格に認められたのである。

五 施設内容の充実

やすは地域にあつては、時代にふさわしい家庭生活の見直しを呼びかけた。東京から講師を招いての洋裁や西洋料理の講習会は主婦たちに喜ばれた。市内の女学校にさきがけて大正一四年からの「和洋のバザー」は、生徒の仕立物、手芸など七〇〇点も展示され、振袖打掛けの花嫁衣裳、紋付重ねなど、裁縫の高度な実力は観客の目を見張らせるみこさであつた。

昭和五年に生徒五五〇名を収容する新校舎、講堂、作法室が後援会の援助で落成し、屋外

東北栄養学校（のち専門学校）を設置、なお二五年には念願の東北女子短期大学を、全国にさきがけて開設した。一人の女性の不屈の努力と情熱が、長い苦闘の歳月ののちに、生涯の夢であつた大学を実現したのである。

晴れの開学式は五月一日、しかも「母の日」であつた。講堂を埋めた教職員・生徒・関係者・来賓の前に、黒紋服の正装の胸に藍綬褒章と大輪の白バラを飾つて、感激の式辞を述べていた学長柴田やすの姿が、にわかに壇上に崩れたとみたが、そのまま劇的な最期を遂げてしまつたのである。七〇歳であつた。この時やすの懷中にはたぶん祝賀の席で披露するはずの和歌二首があつた。その一首がいまやすの慈愛で大きく成長し、学園の前身に茂るニワウルシの樹下に立つ歌碑に刻まれ、朝夕、人々に仰がれている。

大学を建てしるしにをどめどち
励み学びて尽せ世のため 安子

やすの遺業をついだ次女今村敏は四四年に東北女子大学（家政学部）を開学し、既設の諸学校と合わせて、さらに大規模な総合学園を完成した。
（東北女子大学教授 森山泰太郎）

※一〇月号七八頁で「擗けた」の文字が間違つておりました。訂正し、おわび申し上げます。

教え子の慈父のごとく その生涯を中等教育のために

富田 小一郎



日本一の謝恩会

時は昭和十四年（一九三九）六月三日。ある謝恩会会場に当時日本一幸福な先生とよばれた富田小一郎がいた。そう呼ばれた理由は、教え子に米内光政海相、板垣征四郎陸相、及川古志郎海軍大将、郷古潔三菱重工専務、鹿島精一鹿島組社長、文学博士金田一京助はじめ、出淵元駐米大使、田子衆議院議員、作家の野村胡堂らがいたことによる。東京でのこの謝恩会の出席者は、盛岡中学（現盛岡一高）の同窓生たちであった。

富田小一郎を迎えて、一同は、一度にクラスの半分も落第させられた思い出や、石川啄木が「よく叱る師ありき、髯の似たるより、山羊と名づけて口真似もしき」と詠んだ話に花を咲かせていた。

八一歳の小一郎は、「私は中等学校教員をやつて足かけ五年になるが、人に教えるという事は、なかなかうまくいかぬものだ。皆一〇〇点取るだろうと思つていると半分以上は落第点だ」と話すなど、一同若返つて時のたつのも忘れるほどだった。

生い立ち

小一郎は、安政六年（一八五九）五月二二日、盛岡城下の加賀野で父哲^{とせ}、母ミヨの二男として生まれた。父は藩主の御小姓や側目付を務めるなど二〇〇石を給されていた。

明治維新で時代が大きく変わったころ、一〇歳の小一郎は、藩校の作人館修文所へ入学し、主として数学と英語を習った。

明治二年（一八六九）一一歳のとき、母が亡くなり、父は藩職を続けていたが、明治四年役職を辞した。このころ小一郎は、父の勧めで特別に横田龍郎先生宅へ出かけ、数学の三角法の初歩の勉強を二年間続けている。

当時、戊辰戦争に敗れた南部藩の最大の課題は、教育による人材育成にあることを、小一郎は子どもながら強く感じていた。小一郎の教師になるきっかけは、このころにできたものであろう。

向学心に燃え上級学校へ

小一郎一六歳の夏、東京で学業に励んでいた兄大二郎が亡くなった。学資に窮し、アルバイトをしながらの死であった。小一郎は医者にかかることもできず若くして亡くなった

兄を思い、固く心に期するものがあつた。

「学問に一層精進して、早く父母を安心させたい。同時に健康に注意し長生きしよう。兄の分まで長生きしなくてはならん、決して早



盛岡中学教師時代（前列中央富田、右端石川啄木）

死にしないことだ」と。

向学心の強い小一郎は、明治八年（一八七五）三月、盛岡を出て伊達氏の城下町仙台に設立された宮城英語学校に入学する。英語と

数学を熱心に勉強した。翌年の春、小一郎の向学心はますます強く、文明開化の花開きしかも学資の得やすい東京で学ぶことを父に申し出て、早速上京し、南部家四一代の利恭が創立した英語の予備校である共懐義塾^{とくわいぎじつ}に入学した。ところがこの直後の四月、父の急死に会い、東京での勉強は困難となつてしまったのである。

再び仙台の学校に戻った小一郎は、改称になった県立仙台中学校を明治一〇年（一八七七）に卒業、直ちに上京し東京大学予備門に合格したが、学資が乏しく、大学入学は思いもよらない状態で、学資のいらない学校を考えざるを得なかった。

明治一〇年の暮、三菱商船学校（のちの東京高等商船学校）に入学し、子どものころ北上川で泳いだ体力と持ち前の気力でがんばったが、しかし、小柄な小一郎は過労のため実習が不可能になり、やむなく退学、病氣快復のため帰郷する。明治一二年、はたちの暮である。

教師生活始まる

帰郷してまもなくの明治一三年（一八八〇）二月、小一郎は岩手県立師範学校の教師となつた。うれしい月給であったが、小一郎が一家を支えるには苦しいものであった。また、

自分の数学の学力の低さにも痛感していた。
小一郎は数年で師範学校の教師をやめ、宮城県農事講習所（のち農学校）教師として仙台へ赴任した。月給二〇円で、妻眉との新婚生活であった。

明治一七年（一八八四）の秋、東京の親友中原氏から「弟貞七が成立学舎を経営している。単身赴任なら生活も十分にでき、東京大学選科に入り勉強もできる」との手紙に、急きよ農学校教師をやめ、単身上京した。

明治一八年（一八八五）一月、小一郎は高校の予備校である成立学舎の教師となった。新渡部稲造、棚橋綱子、大隈（南部）英麿等も教師をしていた。生徒には太田達人、夏目漱石、田丸卓郎たちがいて全国から数百名が集まっていた。

小一郎はここで教えながら、この年の九月、東京大学法学部理財学科（経済学）へ撰科入学し、勉学に励み、明治二一年（一八八八）無事卒業した。三〇歳の秋であった。

盛岡中学校教師時代

東大卒業後一年あまりして、小一郎は盛岡市の岩手県尋常中学校（のちの盛岡中学校）教師となった。念願の数学を担当したが無資格だったため、明治二五年（一八九二）五月から一年間、校定試験勉強のため中学校へ勤

一郎は、青森第二中学校（八戸中学校）に転勤を余儀なくされた。毎週土曜日ごとに帰盛しては、夜間商業高校の経営に当たっていた。こうして二年後、転勤を命ぜられたのを機会に青森第二中を退職し、盛岡へ戻ってきた。市立商業学校設立への決意を胸に秘めての帰盛であった。このとき、小一郎四五歳。

盛岡に戻った小一郎は、三田俊次郎の作人館中学部に勤めながら、夜間商業学校にかわる市立商業学校設立へ市内有力者の賛同寄付をもつて市長へ働きかけた。ところが、意図した許可が得られず商業学校実現は水泡に帰してしまつた。さらに明治三九年（一九〇六）、自ら経営してきた夜間商業学校も廃校となった。

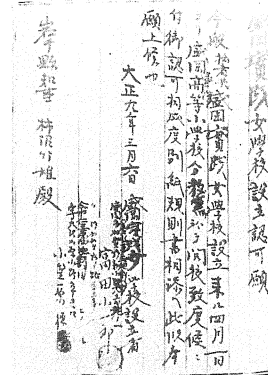
しかし、小一郎は商業教育の必要性を考え、なんとしても商業学校実現を図るべく、その資金づくりにと遠洋漁業を始めたのが明治四〇年（一九〇七）のことである。

親友の三田義正、斎藤源五郎と小一郎の三名で作った三立丸で、四年半も漁業を展開したが、資金はたまたらず事業は失敗に終わった。

商業学校校長として

七転び八起きのごとく、盛岡に戻った小一郎は再び作人館中学部の教師となり、さらに

めながら、下村泰中和尚の報恩寺に合宿し、数学を一心に学び文検合格を達成した。この和尚との一年間の朝夕をともにしながらの生活が小一郎の生涯に大きな影響を与えている。盛岡中学校には明治三四年（一九〇一）ま

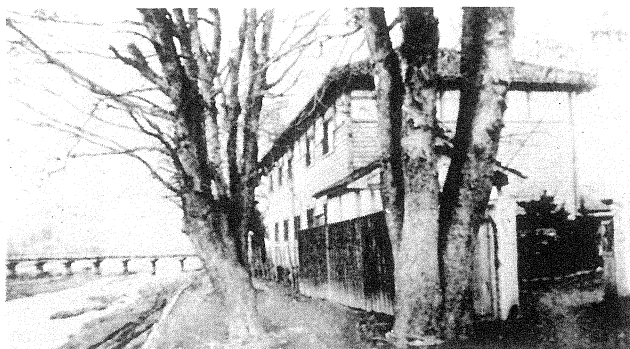


盛岡実践女学校設立認可願

での一〇年間勤務し、盛中黄金時代の一翼を担った。それは、教え子の中から多数の偉人を輩出したことによる。米内光政を筆頭に大臣四名、博士三名、文化勲章受章者二名、

自ら夜間部の簿記学校を始めた。商業学校の夢を捨てきれなかったのである。家計は最も苦しいときであった。

しかし情勢は変わってきた。大正二年（一



中津河畔当時の盛岡女子商業学校

九一三）になり、念願の市立商業学校設立となった。小一郎は、校長兼教諭として迎えられたのである。貧しい生徒には学費を援助したり、卒業生の就職あっせんも校長自らが行

陸海軍将官四名、大会社社長十余名、その他教育者、石川啄木や野村胡堂等文士などがいた。小一郎は晩年「されど、小生は自分の力にて立身せしめたる自慢の教え子は、遺憾ながら一人もなしと自白せざるを得ず。故に教え子として申し述べるは、教え子にして教え子にあらずとも申すべし」とけん孫している。また試験が厳しかったことについては、「一度や二度の落第で閉口するようでは、偉い者にはなれない」との信条から生まれたものであったと述べられている。

市立盛岡商業学校設立への動き

明治三〇年（一八九七）、盛岡に商業学校（夜間）が設立され、小学校の一部を借用して授業を行っていた。小一郎は盛岡中学の教師のまま、講師として兼務していたが、経営者が転任となり、この学校のおとを託されたのである。「なんとかやっていこう」小一郎は決心した。これが苦難の学校経営のはじまりとなった。

独立校舎もなく、ランプ照明での授業で市からの補助金でやっと経営が成り立っていた。しかし、小一郎は校長兼教諭となり、実用的授業内容の充実に努めた。一方明治三四年（一九〇一）、盛岡中学でストライキがあり小

う奮闘ぶりであった。

しかし六一歳になった大正八年（一九一九）、節約論の訓辞が誤解を招き商業学校を去らざるを得なかった。翌年岩手県立農学校教師となった小一郎は同年、私立盛岡実践女学校を創立し、校長として、女性の職業人として自立できる力を養うことになった。

盛岡実践女学校は、この後、幾たびかの校地の変遷を重ねながら、校名を盛岡女子商業学校（大正九）、盛岡市立女子商業学校（昭和一五）、戦後の学制改革を経て現在の盛岡市立高等学校となったのである。

富田小一郎は、人づくりのため常に中等教育の先頭に立つて実践する行動的教育者であった。人づくりは「情熱にあり」を示した人でもある。晩年は女子教育の父ともいわれ、昭和二〇年八七歳の生涯を閉じるまで、女子商業の校長であった。岩手育英会の創設者でもあった富田小一郎。その生涯は、教育愛と不屈の精神あふれるたくましい道程であった。

【参考文献】

- 堀内正己『教育の父富田小一郎』
- 富田雄二『不屈の人富田小一郎』
- 盛岡市立高校五十年記念誌
- 岩手県立盛岡第一高校図書館報第38号
- 岩手大学教育学部附属小学校副校長 佐々木和夫

郷土に生きて

国語教育の歴史的潮流をつくった
北方の父

菊池 讓



渦巻く新思潮の中で

大正から昭和の初期は、日本の教育の夜明けのときだといわれる。国語教育もまたその例外ではなかった。多彩に湧き起こる主張、高潮する言論、けんらんたる実践の諸相など、あふれるばかりの活力を呈していた。

事実、この時期が国語教育論争の最もはばなしいときであったことは、諸文献に見るとおりである。すなわち、大正デモクラシーに象徴される自由主義、児童中心主義、文芸至上主義など、新しい思潮の教育運動がほうはいとして起こっていたときでもある。

国語教育においても文芸主義的な主張が一時本流の感があったが、これへの批判として形象理論の論議がたたかわされ、それが解釈学に至って最高潮を示していた。かくのごとくゆれ動き、燃え上がる論争の中で、遠く地方の声をあげて堂々の主張を張り、実践を深め、若き同志を温かく指導育成していった名リーダーこそ、菊池讓その人であった。

中央依存、中央志向の強いときにあつて、徹底して地方教育に根を下ろし、「村の読み方教育論」を全国的に普及、やがては生活主義、生活綴方、北方性教育へと進展する歴史的潮流の源をつくったその教育業績は後世に継が

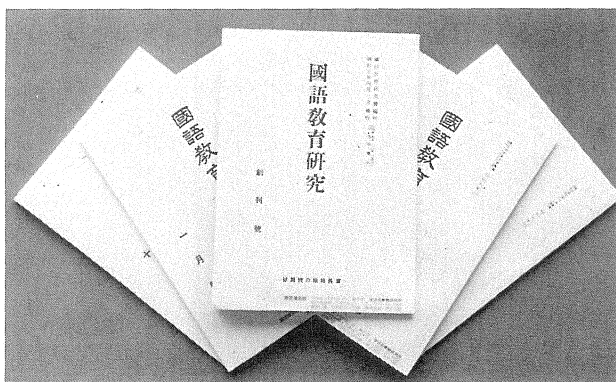
れて賞揚されるべきと思うのである。

国語教育への出発

湧き出し奔流する国語教育の主張の中で、自らも一つの源流となり、新しい潮流をはぐくんだ菊池讓。彼の国語教育への道程もまたドラマチックである。

菊池讓は、明治二十七年（一八九四）宮城県桃生郡橋浦村（現北上町）に呱呱の声をあげた。同郡飯野川小学校卒業、県立古川中学校（現高校）に入学したが中退。母と父の続いたの死去、加えて彼自身の病弱のためだった。その後兩三年を、石巻一名古屋―東京と治療闘病のまるで放浪生活だった。こうした孤独な青春時代を経て、月俸八円也の代用教員となったのは大正二年も一〇月だった。このころすでに国語教育研究家への萌芽をあらわし、童話の研究に熱中、「童話の教育的価値」の論を草して河北新報に投じ、三回にわたって掲載された。大正七年尋常科正教員の免許状を受け、小学校訓導としての活躍に入った。

ときあたかも大正デモクラシーの成熟期、西欧思想を背景とする新しい教育運動が続々と起こっていた。いわゆる八大教育思潮が天下を風靡するものがあった。このころの新思潮研鑽生活の心意気を彼の自編の年譜に書き



昭和7年に創刊された教育誌「国語教育研究」

添えている言葉が印象的である。すなわち、大正七年一月、尋常科正教員の免許状を受く。――この時から教壇に一生を託せんと決す。大正八年一月、真野小学校訓導拝命――このころ八大教育思潮の一つ、及川平治氏の「分団式勤的教育法」に傾倒す。

同年九月、若柳小学校に転任――手塚命吉氏の「自由教育」に興味を持ち、千葉県師範学校附属小学校を視察見学――ここで自己の無学を痛感。ひそかに決意して、一日百ページ主義を誓い、がむしやに本をかじる。と思えば、後年国語教育研究実践家の若者たちを率いて、哲学論に、文芸論に、国語教育論にと、深遠な言論をもって万丈の気を吐く素地は、この間における自己研修によって培われたものと思われる。

大正一〇年六月、宮城県初等教育研究会において「読書力の養成を主眼としたる読み方教授」を発表し、ここに国語教育に慧眼を持つ青年教師ありと県下の注目を浴びるに至った。彼の若干二十七歳の時であった。

大正一二年、若柳小学校より宮城女子師範附属小学校に抜擢され、このときから、県下小学校国語教育のリーダーとしての道のりが始まった。正規の免許状を持たぬ彼の登用は、県下教育界の注目するものであった。彼の卓越した才質がしからしめたのはもちろんだが、その実力と真価を見抜いて極力推輦した校長

山内勝治郎氏と採用を決したときの女子師範
附属小学校主事二階堂清壽氏（後、日本女子
短期大学長）の見識と勇断を物語るものとし
て、いまなお爽快な語り伝えとなっている。

昭和三年、小学校本科正教員の免許状取得。
附属小学校に着任して二年目であった。この
ころ彼はもう押しも押されぬ国語教育指
導者として充実した地歩を示していた。翌、昭
和四年には「国語読本の学び方」全六冊を完成。
県下各地から招かれて、指導授業に、研究
会に講習にと席暖まる暇もない東奔西走ぶり
であった。

昭和七年四月、宮城の国語教育向上に寄与
せんことを期し、同志と図って、教育研究誌
「国語教育研究」を刊行。同年一月には同
誌の主張に基づく第一回の国語講習会を開催。
講師に、丸山林平、三沢諄治郎、千葉春雄の
三氏を招き、県下国語教育に新しい灯を点じ
たのである。

「国語教育研究」の菊池譲

菊池譲が兄事し敬愛して親交した千葉春雄
が東京高等師範附属小学校から転じて厚生閣
にあり教育誌「教育・国語教育」を創刊した
のは昭和四年、菊池譲が相呼応するかのよう
に地方にあり仙台の地に「国語教育研究」を
創刊したのは昭和七年。中央と地方で、ぼぼ

新しい集団となり力となって、「生活綴方」・「北
方性教育」へと発展した。その歴史的潮流を
作り上げたのは、この研究誌によって活躍し
つつ後生を育てた菊池譲の尽力である。時代
を超えて評価し賞揚されるべきであろう。

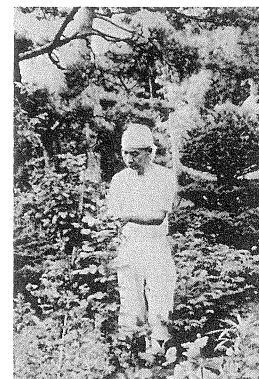
ところが、この良心的な研究誌さえも休刊
の止むなきのときがきた。軍国主義の暴走の
とき、昭和十三年四月であった。休刊の事情
を彼は次のように記録する。

昭和十三年四月、時局に鑑み「国語教育
研究」を休刊す。創刊以来六巻、全二四冊を
世に送り、県下並びに北日本に、多少の貢献
をなし得たりと、自負するものなり」と。

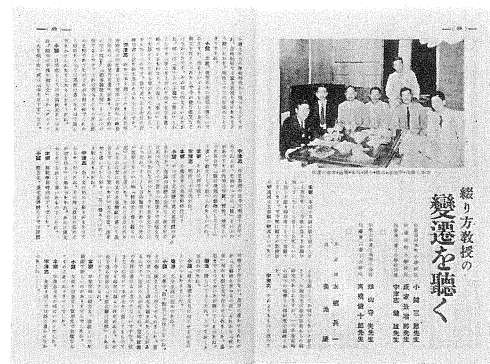
簡潔に語る中に、信念に生き自信に満ちた
活動の終止を告げる淡々たる心境が言外の言
をさそって胸をうつものがある。

種子をまく人として

菊池譲が「国語教育研究」によって立つた
とき、彼を慕う若い情熱家の教師たちが、続々
とその傘下に集まった。彼の主張に感銘し、
彼の言論に感激し、彼の人間的魅力にひかれ
たのであつたらう。めんどう見のよい彼は、
だれをも友のごとく迎えて、諄々と熱意をこ
めて所信を説き、温かく抱えて、多くの人材
を育てた。彼ははともど温情家で几帳面、信



ある日の菊池譲



「国語教育研究」の内容の一部

時を同じくして生まれた研究誌は、わが国の
国語教育を導き照らすふたつ星であるかのよ
うに輝いた。

「国語教育研究」の最も中核となる考えは、
彼が日ごろ実践している「地に即き、児に即
き、われらの目でみ、われらの手で営まらるべ
き国語教育」の提唱である。この提言は一見
平凡単純なる主張のようであるが、当時の社
会情勢では、地方教育は一概に中央依存に傾
き、中央志向は当然としたものだった。この
ような情勢にもかかわらず、地域の現実立
つて子どもたちの生活に即した教育の提唱は、明
確に主体性を持ちつづけた教育実践の主張で
あつたことに目を見張るべきものがある。

もともと菊池譲の国語教育論は、解釈学に
基礎をおく理論で、具体的実践を地域（生活
の場）と児童の現実重視の上に展開しようと
する主張で、日ごろ彼が掲げる「村の読み方
教育論」そのものであつた。

彼の主張する見解は、農山漁村の教師たち
に共感を呼び、高い説得力となって伝播した。
県内はもとより東北・北海道まで広がる共鳴
を集め、若い情熱をもった教師群が彼の主張
に参加した。誠実、温情家であつた彼は友人、
同志として温かく親身になってめんどうを見
た。かくして、「国語教育研究」により、彼に
ついてはぐくまれた人は、やがて彼等自らが

念に燃える情熱家でもあつた。また、物事を
決して中途で投げ出さない東北人特有の美質
をも備えていた。こうした人徳に抱擁された
指導を受けた人々が、宮城の地はもとより東
北、北海道に広がり、やがて戦後の教育界に、
国語教育のみならず、新教育のリーダーとし
て、大空の星のごとくに輝いた。まさに彼の
投じた種子が美果を結んだといつてよい。彼
が「北方の父」として敬慕されるゆえんは種
子まく人への尊称にほかならない。

菊池譲の教員生活は、附属小学校勤務の華
やかなときがあつたとしても、教育者として
は必ずしも世俗的に恵まれたとは言われない。
彼は一〇数年にわたる小学校長歴を持ちなが
らそのすべてが草深い農山村であつた。わが
国の国語教育の一つの源流を作りながらも、
あえて主流からそれるがごとく「村の読み方
教育」に徹し新しい潮流をはぐくんだ人とし
て長く歴史の中で回想されるだろう。

種子まく人はいつの世も孤高な生涯を生き
るものらしい。彼の晩年晴耕雨読の生き方に
もその影を見る。

昭和四五年四月遂に逝く。

【参考文献】

「国語教育研究」（全）すばる教育研究所（復刻版）
「宮城県百科事典」河北新報社
「北方の父」すばる教育研究所（復刻版）

（財）宮城教育振興会評議員 村田幸造
（社）仙台ユネスコ協会理事

小野崎 晋三

秋田県の音楽教育の礎を築く



音楽の道への強い志

小野崎晋三は、明治三十六年三月二日、現在の秋田県河辺郡雄和町川添字下黒瀬で六人兄妹の長男として生まれた。晋三の父は靱負とい、下黒瀬小学校の校長を長年勤め、校務のかたわら地域の青年教育などにも尽力し、信望厚い人物であった。

下黒瀬の校長住宅で育った晋三は、幼いころから学校のオルガンに親しみ、小学校へ入るころには、先生に代わって歌の伴奏をしたという。高等科を卒業したのち、父の跡を継いで教師の道を選び、大正七年秋田師範学校本科第一部に入学した。そこでのちの自分の

本格的な音楽教育活動の開始

昭和二年東京音楽学校甲種師範科を卒業し、岩手師範学校教諭兼訓導として就職することが決定した。ところが、同年、父靱負の突然の死によって、晋三が一家を支えなければならなくなった。三年後の昭和五年三月、ちょうど学級増となった秋田県立本荘高等女学校の音楽科教員に任用された。ここから本県における音楽教育活動が展開されることになる。赴任して間もなく、由利郡音楽研究会を結成して副会長となり、音楽教育の普及と指導に着手した。またこの年、県音楽教育協会と教員合唱団を結成したとも伝えられる。このころの晋三は、当時さかんであった童謡の作曲に深い関心を抱いていたようで、私家版『小夜楽』には多くの自作童謡が掲載されている。翌六年七月、秋田県師範学校教諭に迎えられる、活動の舞台は全県へと広がった。

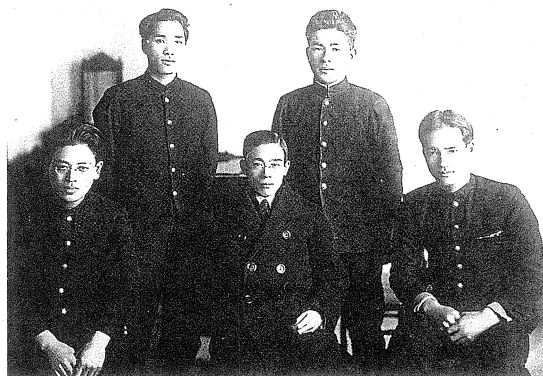
この年の秋、師範学校に吹奏楽団を結成した。もともとこれは昭和八年からやつと小編成ながら演奏活動ができる規模だったようである。同七年には、東北地方で初めて、教員の有志による秋田県教育音楽協会を組織し、各郡市に支部を結成することにも、中央から講師を招いて音楽講習会を開き、普及につとめている。また、昭和八、九年のころから母校東京音楽学校の学生を招いて演奏指導を積極的に行っていたと伝えられる。そして、同一三

専門とするピアノとの出会いがあった。後年「ピアノというものは師範学校に入った一六歳のときから始めて見た」と何度か述懐しているが、学校にたつた一台きりのドイツ製グランドピアノを生まれて初めて見たときの印象は、強烈なものであったろう。当時秋田市内のピアノの台数は、わずか四台にすぎなかった。このことは秋田県の音楽の普及を伺い知るひとつの指標となると思われる。

大正一一年師範学校を卒業し、地元の豊岩尋常高等小学校訓導として任用されたが、ピアノへの思いは強く、全県最初の堅型ピアノを備えた秋田市の中通小学校への転任を希望した。翌年幸いにもその非凡な音楽的才能が評価され、転任が決まった。

そのころ「ソナタをひけるのはまずまずで、かく申す私などもソナチネの域を出ないみじめさ」であったと晋三自身が語っているが、秋田の音楽教育のレベルも、指導者不足と普及の遅れによって低いものであった。そのため晋三は、当時のピアノ界の長老高折宮次に教えを請うたためたびたび上京した。ピアノの技術向上をめざすこの強い向上心が、ひとつの決断を生んだ。それは小学校を退職し、東京音楽学校に進学することであった。

大正一三年、晴れて東京音楽学校へ入学を許可され、熱い心を抱き上京した。



東京音楽学校当時の晋三（前列左端）

年には小中学校教員による秋田県音楽教育研究会を創設し、晋三が初代会長に就いた。以後二六年間その代表を務めた。

一方、秋田市内の学校の教員をもって混声合唱団を組織し、NHK秋田放送局から毎週一回合唱を放送したり、晋三を会長とする秋田県吹奏楽連盟を結成するなど、各種の県内音楽組織づくりを着実に進めた。

昭和十一年、秋田県は文部省から綜合郷土研究に基く郷土教育の指定を受け、秋田師範学校が中心となって研究を進めた。晋三は「郷土芸術」の分野を担当し、県内の舞踊・民謡についてまとめた。このときの経験が、秋田の風土と文化についての理解を促す基礎となり、のちの音楽活動に大きな影響を与えている。

当時昭和四年から同一〇年までの昭和恐慌期の日本経済は、かつてない状態であった。さらに軍国主義的風潮が進み、華麗な調べよりも軍楽調が求められ、心のゆとりもなくなるなかで、本来の音楽教育を守り、それを実践していったことは高く評価される。

戦後の音楽教育組織の充実

戦後、晋三をはじめ音楽を愛好する人々は、直ちに音楽教育活動を再開した。いち早く全県吹奏楽連盟、秋田県作曲家協会を結成することともに、第一回秋田管弦楽演奏会、同全県合唱祭開催など、本県音楽教育史にのこる事業を企画し、主導していった。

晋三の存在を内外に知らせ、これまでの音楽教育の成果を全国に問うた総決算は、昭和三十六年の第一六回国民体育大会秋田大会における音楽演奏班長としての活躍と、昭和三十八年の第一〇回音楽教育研究会全国大会の秋田大会での成果であろう。

国体の開会式では、県内の高校生と市内中学生合同による六五〇人という大編成の吹奏楽団の陣頭指揮を執り、全国に秋田県の吹奏楽の成長の成果を示すことができた。そして、これがその後の国体のモデルともなったといわれている。「国体を契機として、音楽文化は一〇年の進歩をみた」と称しても過言ではない」と自身が総括しているように、この国体が秋田県吹奏楽レベルの向上の契機となり、今日の吹奏楽全国コンクールでの上位入賞の基盤となっていることはいうまでもない。

また、音楽教育研究会全国大会では、晋三自身が大会賛歌として、本県出身の作曲家成田為三の「決別の歌」を混声四部合唱に編曲したのをはじめとして、本県の音楽教育の成果を問い、全国にその水準の高さと層の厚さを強く印象づけた。

今に生きる

県の音楽教育界のいわば頂点に立ち、指導した功績を認められ、昭和二十九年には秋田県教育功労賞、同三十二年秋田県文化功労賞を受



昭和38年7月の第10回全国音楽教育研究会の開会式終了後会場入り口にて(右から三人目)

晩年の昭和四三年、『河北新報』に「音楽と共に四十七年」と題して一文を寄せている。そのなかで吹奏楽、合唱界、秋田県合唱連盟、管弦楽、短大新設音楽科に分けて回顧しているが、微細にたどれば各組織の名称上の変遷はあるものの、戦後創設された本県音楽教育界の組織や事業で晋三の手にかからぬものはないといつてよい。

晋三の練習の厳しさは有名で徹底したものであった。「音楽教育の中にも、心魂をノミをきたえよ」とは、晋三が常に口にしたことばであった。師範学校では剣道の選手として活躍し、剛健な秋田県人らしく、かつ戦時中でもダンディな服装を崩さなかったという晋三には、音楽の道に關しても一種の峻厳さがあつた。

また、晋三の後継者作りはつとに有名である。例えば、秋田県では最も古い歴史をもつ混声合唱団「カンパネラコール」は、クリスマスのキャロルを歌うため、占領軍軍政部からの命令により結成された。団員は市内の学校の音楽部から選抜し、この指導には小野崎晋三が当たった。その後より後継者、今はなき木内博を得て、公務員・会社員など広く市民も参加し、定期演奏会の開催、各種芸術祭への参加等を通じて秋田県の音楽水準を高めることともに、それらの活動を通じて後継者を着実に育てて今日にいたっている。

賞した。同四三年秋田大学を退官したあとは聖霊女子短期大学音楽科主任教授として迎えられ、活躍を期待されたが、翌年六六歳でその生涯を終えた。勲三等旭日中綬章を授与された。

晋三は、音楽教育組織の確立と普及の仕事とともに、全県の小学校・中学校・高等学校の校歌をはじめとして、国歌・団体歌など、数多く作曲を残し、広く愛唱されている。昭和二十四年母の日制定記念に募集した歌詞「いいかあちゃん」、歌曲「桐の花」、合唱曲「秋田民謡連歌、生保内節・ひでこ節」など郷土のよさを引き出した作品がよく知られている。

また、五人の子どものうち三人が音楽家となり、現在日本の音楽界の第一線で活躍している。

生涯音楽人として生き抜いた晋三の強い意志が受け継がれ、そこに生きているように思われる。

(秋田県教育委員会文化課学芸主事 高橋 務)



秋田大学学芸学部創立85周年記念演奏会で指揮をとる晋三

信念と実行の教育者

千喜良英之助

千喜良英之助は、昭和の戦前・戦中・戦後の激動期を通じて、不屈の精神をもって、数々のすぐれた教育実践を残した偉大な教育者である。



盛岡を去り、沖縄へ行く直前の千喜良英之助（昭和7年9月頃）

英之助少年の生活

千喜良英之助は明治二九年九月十五日、山形県南置賜郡南原村大字芳泉町（現、米沢市大字芳泉町）に七人兄弟の二男として生まれた。父は小学校教員であったが、給料だけで大家族の一家を養うのは容易でなく、養蚕や畑作の副業も営み生計を立てていた。小学生の英之助は学校から帰るとすぐ畑に出かけ、桑摘みや野菜栽培の手伝いに精を出した。

明治四三年に県立米沢中学校に入学したが、中学生時代も積極的に桑摘みや畑作に励み、学校の往復、あるいは畑仕事へ行く道々で本を読んでいたという。弟に「お前は二貫匁（七・

五kg）摘め、俺は八貫匁（三〇kg）摘む。」と桑摘みのノルマを割り当てるときなども、弟たちに対して実に寛大であった。

中学三年の時には、すでにルソーの『エミール』を愛読しており、人を教育することに強い関心をもち始めていた。そして、「俺は教育者になる。そして貧乏な農民の味方になるような人をたくさん養成したい。」と固い決意をもって将来の進路を話していたという。

実弟の回想によれば、近所の主婦が雇われて桑畑の仕事をしていた時、夕方になると英之助はその主婦に「もうよいから家に帰りなさい。子どもが待っているから帰りなさい。」と一時間も早く帰し、「あの人の分までもう一ふんばりやろう。」と薄暗くなるまで働いた。また、ある時、父親が貸した僅かな金の代償として、その息子を桑摘み人足に何日か来させて働かせた。その最後の日、英之助は「親父が借りた金は親父の責任、息子が働いた賃金は息子のもの。」と言って父と激論を交わし、その息子に対する桑摘み賃を父に払わせたいというエピソードもある。

東京高等師範学校での生活

大正四年に米沢中学校卒業後、上京し、先

輩である童話作家、浜田広介の借家の一室を借りて予備校に通い、翌五年に東京高等師範学校に入学した。彼は自らの胸に育んできた教育者としての夢を実現するため、博物か農業の教師になる道を選んだのである。

大正八年、志願兵として歩兵第三二連隊（山形）に一年間入隊、満期除隊の後、再び東京高等師範学校に復学し、大正一〇年三月に卒業。同年四月に長野県立大町中学校教諭となった。理想と現実との狭間で、教育哲学の勉学を志向した千喜良は大正一二年四月に東京高等師範学校専攻科修身教育科に入学し、紀平正美教授のもとでデュイイの教育哲学を研究し、論文「実践行としての教育と科学としての教育学」を執筆して卒業している。

岩手・沖縄での教育実践

大正一四年四月、三〇歳のとき岩手県師範学校教諭兼附属小学校主事として赴任、翌一五年には男子師範代用附属の盛岡市仁王小学校訓導兼初代校長となった。

千喜良は附属仁王小学校において、斬新な数々の教育実践を行っている。朝礼時の体操を号令にかえて、音楽のリズムに合わせてやらせたり、赤十字病院の看護婦の学校常駐、促進学級（精神薄弱児学級）の設置、男女混合学級の実施、愛国心を育むための国旗掲揚塔の

設置、教職員の総意を学校経営に反映させることをねらいとしての会議制委員会の組織化等々である。

昭和六年に附属仁王小学校長から師範学校舎監に命じられた千喜良は、生活即教育の見地から寄宿舎の大改修を断行した。生徒の手になる水泳プールの建設、農場の整備、精米機・洗濯機の導入、喫茶店、売店の設置などをつぎつぎと実行に移していった。若い教師のたぎる教育的情熱と生徒を愛する熱情は生徒六〇〇名の厚い信望を得た。

昭和六年の暮、岩手医専に端を発した思想事件は師範学校にも波及して、約一〇〇名にのぼる生徒や卒業生が特高課の取り調べを受けた。係官の「尊敬する先生はだれか」の尋問に、ほとんどの者が「千喜良先生」と答えたとの報告を受けた教育行政首脳部は、県知事と相談のうえ、千喜良の転任を文部省に働きかけ、沖縄県女子師範学校に転出させることにした。

このことを知った六〇〇名の生徒全員は、知事や文部省あてに留任陳情書を提出し、留任運動を続けた。千喜良は生徒たちのこうした行動を抑え、代表を呼んで諄々と諭し、あくまでも軽率を戒め、涙にむせぶ生徒たちに見送られながら沖縄へ旅立った。

昭和七年九月三〇日付で沖縄県女子師範学校教諭兼舎監となり、その後、同一〇年五月に

沖縄県立第二高等女学校長に任じられた。翌一年四月に第二高女が焼失したため、千喜良は校舎の復旧に全力を注ぎ、見事に校舎を再建している。沖縄にあっても、相変らず厳格ではあるが同情心の厚い千喜良は、健康を害し、本土への修学旅行を取り止めた三人の生徒のため、その年の夏休みを利用して自ら引率し、生徒の念願をかなえてやっている。

ふるさと米沢に帰っての教育実践

母校の中学校長としての教育実践 昭和六年五月に郷里の米沢から懇願され、母校の県立米沢興譲館中学校長兼米沢夜間中学校長として勤務することになった。

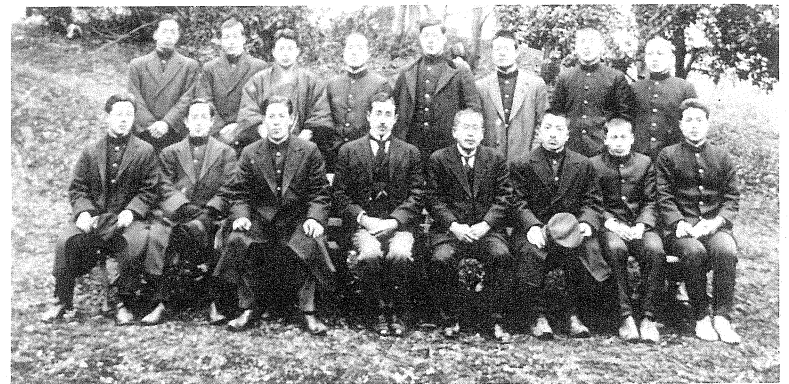
母校の中学校長となった千喜良は、郷土の米沢藩主上杉鷹山が細井平州を藩校興譲館に招聘したように、すぐれた教育はすぐれた教師によって生まれるとの信念を実行に移し、自ら高等文官試験の合格者や若い学究など、優秀な人材を教師として集めるのに腐心した。彼はそのため生家の田畑を売却してその資金に当てている。千喜良の苦勞を知った我妻榮（日本民法学界の権威、文化勲章受賞者）をはじめとする先輩や同級生は「千喜良校長後援会」をつくり、賛同者数十名が一人年一〇〇円ずつ拠出し、使途は校長の自由に任すとし、校長を感激させた。千喜良は、その浄財

う深い思慮とともに、何よりも学校現場を重視する姿勢が背景にあったのである。

また、県予算から四〇〇万円を割いて、小・中学校の教員給を全国第三位にまで引き上げたことや市・町立女学校の県立移管、社会教育課の設置、教育行政の民主的な機構と適材の配置など多くの教育上の諸課題に熱意をもつて取り組んだことは高く評価されている。

米沢女子短大創立への尽力 昭和二年四月に、再度米沢興譲館中学校長となり、更に昭和二七年四月に米沢東高等学校長を兼務した。千喜良は、地方の生徒に広い視野を持たせるには、一流のものに触れさせる必要があると考へ、乏しい学校予算を割き、毎年必ず第一級の学者や芸術家を学校に招き、講演会や演奏会を開き、生徒たちをしてその香気に触れさせた。

更に、千喜良はこれからの時代には、女子の高等教育機関を設置することが郷土の発展にとつて是非必要との考えから、現在の県立米沢女子短期大学の設立のため、陣頭指揮を取って準備に奔走した。当初、県立としての申請が困難な状況にあつたため、米沢市立に方針を変えなければならなかつたが、市議会において、千喜良は高邁な理想に基づき諄々とその設立の意義を説いた。千喜良の信念が



東京高等師範時代前列右から2人目

を、すぐれた人材の養成と自由闊達^{くわだつ}の風氣を旨とする学校経営に惜しみなく使った。この後援会は、千喜良が昭和二〇年三月に召集を受けるまで継続された。

戦後教育問題の処理 終戦を迎え、郷里に復員してきた千喜良は、昭和二年四月に山形県視学官兼学務課長として、アメリカ軍政部の指示をうけながら、戦後の教育問題の処理に渾身の努力を払うことになる。

解決すべき問題が山積した中で、千喜良学務課長が勇断をもつて対処したものに、教員の適格審査の問題があつた。教職員の中から軍国主義者と極端な国家主義者を排除するため、昭和二年四月に勅令により教職員適格審査委員会が設けられ、千喜良学務課長が実務を担当した。そこで彼は審査の結果を「不適格者なし」と報告した。この報告を受けた軍政部はそのことに強い不審を抱いた。千喜良は不適格者がいない理由として、該当者は既に審査委員会発足前に自発的に退職している旨を報告し、容易に納得しない軍政部の説得につとめ、報告どおりの決着をみた。山形県の教職員追放が全国最低にとどまつたのは、千喜良をはじめとする当時の県教育行政首脳部の、戦争責任は、特定個人をスケープゴートにすることで回避できるものではないとい

議員の共鳴を呼び、米沢市は女子短大の設置に踏み切った。初代学長に就任した千喜良は附属生活文化研究所を設置するなど、その内容充実に努力した。今日、本県の数少ない高等教育機関の一つとして、多くの人材を輩出している米沢女子短大の礎はこのようにして千喜良によって築かれたのである。

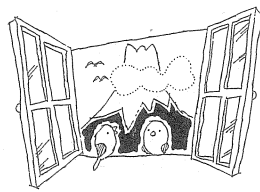
昭和二九年に学長を退き、三一年九月に米沢興譲館高校長を退職したあと、県教育委員に選ばれ、八年の間、県教育行政に尽力した。三九年三月に県教育委員を辞任し、翌四〇年八月、六九歳の生涯を閉じた。

千喜良は生涯にわたってあらゆる人を愛した。特に得難い才能を持つ人材ほど愛した。そして、正論には常に耳を傾けた真の人道主義者であり、真の教育者であつた。

（山形県教育センター所長 曾根伸良）



晩年の千喜良英之助



「行学一如」

愛と自由の中で人材の育成を
学法石川高校生みの親

森

嘉

種



私立石川義塾を創立

学校法人石川高等学校（森 功校長・福島県石川郡石川町字大室五〇二）の校門を入るとすぐ左手に高さ二m余の「森小峯紀徳の碑」がある。同校の前身私立石川義塾、石川中学校の創立者森嘉種の功績をたたえるもので七回忌に当たる昭和十四年九月四日、教え子たちによって建立された。

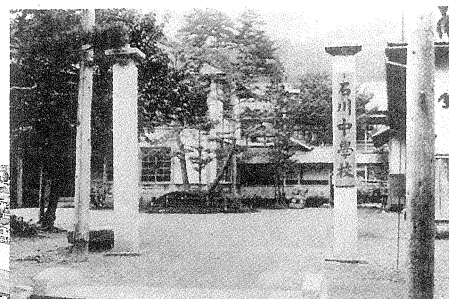
石川義塾は、明治三十五年（一八九二）六月五日、私学では県内最初に創立された。教育の方針は『愛と自由の雰囲気の中で「行学一如」の生活態度を身につけさせ、将来国家社

会のために貢献し得る有為な人材を育成する」とし、これが建学の精神とされている。

碑面に刻まれた「行学一如」の題字は正三位勲二等文部大臣河原田稼吉書。撰文は正三位勲二等文学博士塩谷温、書は正四位勲三等森田実とある。

撰は旧漢字の格調高い漢文で、大意は次のとおり、創立者森の主な業績、人間像などが明らかにされている。

國家興隆の才は學校にあり。育英の任重かつ大なりと謂うべし。石川中学校校長小峯の功徳のごとき、記してこれを伝えざるべけんや。小峯諱は嘉種。森氏世々白河藩主阿部侯に仕う。父嘉会儒を業とす。兼ねて軍學に通ず。君その長子なり。文久二年十二月二十三日生まる。阿部侯御倉に転封せらる。君の家従つて移る。戊辰の役、御倉兵火に罹る。一家大いに苦しむ。君幼にして庭訓を受け、長じて水府に遊ぶ。業成る。職を小学校に奉じ傍ら洋學を修む。研鑽怠らず、中等教員の検定に合格すること五科目の多きに至る。明治二十三年、石川高等小学校訓導に任せらる。その地僻遠にして文教あまねからざるを慨き徒を集め、帷を下し石川義塾を創設す。刻苦經營、つぶさに辛酸をなめ、規模を拡張し、鋭意改善す。四十年四月、文部省の認可を得て私立



開校当時の私立石川中学校(明治40年)

現在の学校法人石川高等学校



石川中学校となす。郷党の恵を受け子弟振々として學に向う。創立以來四十八年、卒業生三千、在校生五百人。これ固より聖代の幸運によるといへども君の率先唱導、百折不撓、終始一貫の力にあらずして何ぞ能く比に至らんや。君また石川郷産世界稀有の銘物を現て自ら地質銘物學を修む。発憤研鑽し、よくその知識を究め、書を著し、世界の學界に紹介す。その功また偉なり。

昭和三年、今上即位の大典を奉ぐ。君多年育英に従事し、力を學界に尽くすの功著しきをもつて特に藍綬褒章を賜う。生徒の光家何ぞこれに過ぎん。君資性溫厚にして身を持すること謹嚴、母に任えて至孝、人を教えて倦まず、猶々として善に誘う。過ちあらばかりせめせず、悔悟に至りて已む。故に生徒の威を畏れ、その思を懷う。君既に詩文に長じ、兼ねて書を能くす。頗る飲を解し、酔えばすなわち朗々と吟誦す。忠孝の大節に至るごとに慷慨淋漓、声浪ともに下る。古武士の風ありという。八年九月四日没す。享年七十二。五男三女あり。長子深造嗣ぐ。理學を修む。現に石川中学校校長なり。近ごろ郷人追慕して已まず。石を建てまつて君の名を不朽にせんと欲し、求たりて文を余に請う。余君を中学校長會議に職を。辞退すべからず、すなわち狀に據り梗概を叙し、筆つに銘を以てす。

明治四〇年、石川中学校に

小さな城下町石川に石川義塾が開塾されるには、森の教育に対する情熱に加え、かつて河野広中らによって培われた自由民権運動の土壌と県会議員吉田光一、松浦勇弥、前県議鈴木重謙らの強力なバックアップがあった。義塾はまず教師二人を招き町内の民家を借りて発足した。生徒は高等小学校卒業程度で四四人が入学、二年制で月謝は二五銭であった。

塾長の森は文久二年（一八六二）二月二三日、白河藩の儒者・軍学者森島嘉、セツの長男として白河城下会津町に生まれた。号の小峯は白河藩の小峯城にあやかった。六歳のとき戊辰の役に遭い、一家は苦難を強いられた。明治一〇年、森は水戸の私学自強舎に入り漢学、算数など修め、一二年三月、宮城県石巻小学校授業員となる。一六歳。一七年には小学校高等科の読書など五教科の教授免許を取得、ついで文検の日本史、万国史に合格している。

石川義塾は翌明治二六年には塾長宅に移り、隣接の寺、繁松院を借りて寄宿舎とした。その後、生徒増に伴い、三二年には郡会議事堂を借りて移転した。数年のうちに義塾の評価が高まり、篤志家から大室地内（現在地）に敷地七反一畝（約七〇四一坪）の寄付を受け、

さらに郡から郡会議事堂が寄贈された。四〇年早々には待望の独立校舎が建設され、郡会議事堂は管理棟に生まれ変わった。

森は三月早々文部省に出向き、直接沢柳政太郎次官に中学校の設置認可を申請し、四月一日認可された。同日塾生らの試験を行い、二五〇人の入学を許可、ここに五学年七学級編成の私立石川中学校が開校した。森は校長に就任、四五歳であった。

石川中学校が郡から補助金を受けていたころ、郡会が開かれると校長が出席して学校の経営状況を説明するのが例になっていた。

あるとき、雄弁家で知られる議員が「石川中学には品行正しからざる多くの生徒がいるときく。かくては善良なる外の生徒に累を及ぼし校名にもきずがつくであろう……」とまくしたて、補助金減額にまで論及した。この



森小峯紀徳の碑

とき、森校長がやわら立ち上がり「お説一応もつとも聞こえるが、不良と目される生徒ほど教化の必要がある。彼らを改過還善せしめていくのがわが校の使命である」と反論、以来苦情をとなえる議員がなくなった、という。

第一二回（大正八年）卒で森の教え子であった元公立中学校長添田久司（現在九〇歳）氏は、「パンカラが少なくなかったが、いたずらをしたときの校長の泣きながらの説得には参った。また、授業のとき、朗々と詩吟を聞かせたりした。同級生に広川弘禪（のちの農林大臣・自由党幹事長）がいた。町で校長に出会ったとみんな歩調を整えて敬礼した」と思い出を語る。

大正一〇年、定員七五〇人が認可される。

光る、森の鉱物学の研究

石川地方は、岐阜県の苗木、滋賀県の田の山上とともに日本三大鉱物の産地で知られている。特に石川山は石川石、サマルスキー、ゼノタイム、モナサイト、燐灰ウラン、ジルコンなど放射性鉱物が多い。これらを発見、研究して学界に紹介したのが森である。塾長、中学校長を通じて四十余年、機会あるごとに鉱物学の研究に力を注いだ。採集した鉱物標本は関係各方面に寄付している。

昭和六年、旧白河藩主阿部正一子爵から鉱物研究の奨励費として五〇〇円が贈られた。これを基に学校内に鉱物館を建設、それまで集めた鉱物標本を展示している。また、石綿枕（新案特許）、めのうの染色加工、石綿膏、ラジウム膏（官許）、板、竹などの染色加工、石綿パイプ、水晶染色など多種多様の研究がある。鉱物研究は二代目の深造校長が継承している。秋田鉱専出身のところから各地の同窓生に呼びかけて標本の寄贈を受け、その数二五〇〇点余。夏休みなどには全国の大学、高校などの教職員、学生が見学に訪れる。

森は、多年私学の振興に尽くした功により、県・郡をはじめ数々の表彰を受けているが、昭和三年には藍綬褒章を受章した。同八年九

月四日没。七二歳だった。
昭和四三年一〇月二三日、福島県明治百年記念式典に際し、先覚者（三〇氏）の一人に選ばれ、県から顕彰された。



森小峯の書

趣味も多彩であった。特に詩文と書をよくし、多くの碑文、七言絶句、律詩を遺している。書は各地で小峯会を催し、好んで自作の漢詩を書いた。

三代そろって藍綬褒章を受く

長男、二代目深造校長も三六年余在職、二六年には私立学校法による学校法人石川高等学校の認可を受け、これに伴う施設整備に努めた。三六年藍綬褒章を受章。四五年一〇月二六日没。八〇歳。

三代目校長は、深造の長男功氏（現在六五歳）が継ぎ、早くも二〇年、私学振興のため各役職を務め、平成二年藍綬褒章を受く。三代そろっての受章である。校長室の机もいすも引き継がれ、管理棟（元郡会議事堂）の石造鯨鯢は新校門の飾りになっている。初代校長が好んだ相撲は部活から姿を消し、まり投げと敬遠した野球は甲子園出場九回を数える。学法石川高校は、明平成四年には創立百周年を迎える。現在二三学級、生徒数一一六七人（男六〇〇、女五六七）、約八割が郡内の子弟である。義塾以来の卒業生は一万六九六〇人。同校はいま百年記念の体育館建設と百年史の編さん事業に取り組んでいる。

【参考文献】

- 『福島県の先覚者』（福島県）
- 『福島県教育史』（福島県教育委員会）
- 『明治百年福島県教育回顧録』（退職校長会）
- 『学校法人石川高等学校要覧』平成二年
- 『小峯餘影』（石川中学校）

（福島ペンクラブ五月会会長 岡部俊夫）

不屈の心でひたすらに生く
日本の保母第一号

豊田 芙雄子



豊田芙雄子

悲運を越えて

維新政府は成立したものの、いまだ戊辰の戦雲^{いくさぐも}漂^{ただよ}う明治元年（一八六八）の暮、水戸城下の夜陰のお堀端を、懐剣を胸に漢学塾に通う若い婦人があつた。夫小太郎の遺言「心を鬼^{おに}にしておれ」（不屈の心を持て）を支えに、ひたすら勉学にいそしむ豊田美雄子二十四歳の姿であつた。

英雄子は、初め冬子と称し、弘化二年（
八四五）一二月二日水戸藩士桑原信毅の次
女として誕生した（嘉永四年の記事もある）。
実父信毅は、兵学・国学に通じていた。生母
雪子も書を能くし、和歌にも通じていた。雪
子の父藤田幽谷は彰考館総裁を務め、兄の

保母第一号に

世の中に落ち着きの見えてきた明治三年（一八七〇）、英雄子は近所の子どもたちと読書を教えた。明治六年には、水戸に全国初の女学校である「英桜女学校」が開設され、英雄子はその教師に迎えられた。校名は、伯父東湖の「正氣の歌」の「発はないては万ばん朶だの桜となり」からの命名であり、新時代の女子教育に対する決意にかなったものでもあった。

明治八年に東京女子師範学校が開設され、校長中村敬宇（『西国立志篇』の翻訳、ドイツ人フレイベルの幼稚園教育に共鳴）は英雄子を招いた。この敬宇との出会いには、豊田家に仕えていた敬宇の門下生である根本正（後の代議士）の仲介があったが、これが英雄子を更に飛躍させることとなった。明治九年、敬宇は同校に附属幼稚園を併設し、その保母専務に英雄子を登用したのである。日本の保母第一号の誕生であった。

主任保母にはドイツ人松野クララが就任し、英雄子は松野からフレーベル保育法の理論と実践を学んだ。

開設当初の苦労に加えて、園児の家人との
 応対は大変なものであった。大多数が高位高
 官の子弟であつたから、ちよつとした傷でも
 大騒ぎとなつた。これに対して、英雄子は辛
 抱強く誠意をもつて臨んだ。

豐田英雄子關係略系圖

藤田幽谷 — 東湖

雪子

力太郎

桑原信毅

英雄子 (次子)

三子 伴

豐田天功

小太郎

司馬四郎 — 伴

年（一八五五）伯父東湖が震災で倒れ、同年には母が、更に五年後には父も失った。冬子一七歳の時であつた。

文久二年（一八六三）、冬子は豊田小太郎に嫁いだ。義父の豊田天功は藤田幽谷門下生で、彰考館総裁を務め、夫小太郎も漢学・蘭学を学び、開国進取の意氣に燃えていた。

このころ、冬子は徳川齊昭の「景山女談」を書写し、婦人の道と胎教の大切さを学び、家庭第一を心がけようとしたが、それは許されなかった。慶応二年（一八六六）九月、京都にいた夫小太郎は攘夷浪によって暗殺されてしまったのである。

二二歳で未亡人となった冬子は、生涯を亡夫の遺志の拡充に捧げようと決意し、義弟の子の伴を養子とした後、名を「英雄子」と改め、ひたすら勉学に励むこととなった。

[illegible]

豊田英雄子著「保育の栞」

鹿児島へ赴く

明治一〇年（一八七七）の西南の役は、鹿児島の人心を荒廃させた。県令岩村通俊は、復興の基礎は幼児教育からとして、幼稚園の設立を決意した。依頼を受けた文部省は、英雄子にその大役を命じた。

鹿児島は、伯父藤田東湖に心酔していた西郷隆盛の生地であり、実兄桑原力太郎が西南戦役で戦死した地でもあった。英雄子は「拝神の辞」を作り、神の御加護を祈りつつ赴任した。土地では、藤田東湖の姪ということが道行く人を立ち止まらせ、あのエライ女先生と評判になった。

大きな使命を果たし終えた英雄子は、明治一三年五月退任に当たって岩村県令に対し、幼児教育で肝要なことは、外面に拘泥することなく、真の性質を十分に伸ばし、想像力を広げさせることを、常の目標としておくことであります。

と建白し、そのますますの発展を願った。

薫陶を受けた保母の一人亀尾は、

いまよりはおさなき子らが泣くこゑに

いくたび君をおもひ出らむ

との和歌を贈り、その別れを惜しんだ。

幼稚園とは何か

フレーベルの思想に、自らの体験に基づく

許された英雄子は、文部省から「欧州女子教育事情取調べ」の任務を委嘱された。

在欧三年のうち、英雄子はローマを中心にイギリス・フランス・スイス等を巡り、女子教育の実態を観察した。ローマ法王への謁見やカーニバルへの感激にもまして、初めて見る女学校の寄宿制度への感動は大きかった。

帰朝した英雄子は、明治二十七年この寄宿制度を取り入れた女学校「翠芳学舎」を東京に開設した。

理想の実現に喜んだのもつかの間、翌二八年には文部大臣西園寺公望から、宇都宮高等女学校の教頭として、校風の刷新を要請された。このため、軌道に乗り始めた学舎は、やむなく閉じねばならなかった。

茨城県の女子教育へ

明治三三年（一九〇〇）旧藩校弘道館を仮校舎として、水戸に初めて高等女学校（現茨城県立水戸第二高等学校）が創立された。東奔西走していた英雄子であったが、いよいよ郷里茨城の教育に尽力することとなった。

明治三四年二月に着任した英雄子は、歴史・地理・国語を担当した。既に五七歳となつてはいたが、三月には『女子家庭訓』上下巻を著作するなど、教育への情熱はますます旺盛



図に就数軍鳩稚幼
「家鳩」の遊戯 正面右端の教師が豊田英雄子

見識を加えて、英雄子は独自の保育論を形成していった。「幼稚園とは何ぞや」で始まる『保育の礎』では、幼稚園を、

多くの幼児を集めてその児の健康と幸福を保ち、良い慣習を与えてしかも最高の楽しみを得させるために、懇切に導くところの「一つの楽園」である

と規定した。また、純真な幼児は萌芽期の草木と同じであるから、その真の性質を伸ばす保育には、細心の注意が必要であると説いた。更に保母としては、保育法に熟練することは当然であるが、最も大切なことは、

「春霞のたなびく如く、精神は常に爽快に」

と唱え、自らもその心構えを貫き通した。

『恩物大意』の中では、具体的な保育法に触れ、「唱歌」は普通のよく知られた歌を教え、「遊戯」は輪形をとって教師もその中へ入り、子どもと同じ心になって遊ぶことの大切さも説いている。フレーベルの「母の歌と愛撫の歌」の中の「鴿舎」を翻訳した「家鳩」は、幼児が手をつないで環をつくり、遊戯する唱歌として広く歌われた。

ヨーロッパ視察

明治二〇年（一八八七）、旧水戸藩当主徳川篤敏の駐イタリア公使赴任に当たり、随行を

であった。心血を注いだ同校の勤務は、二一年に及んだ。その間、明治三六年には女子師範学校（現茨城大学）が開設され、その教諭ともなつて女子教員の養成にも当たった。

昭和二年、八三歳となった英雄子は、水戸大成女学校の校長を最後に公職を退いたが、八〇歳を迎えた大正一三年（一九二四）、それまでの功績に対して従五位を贈られた時、

鉾とりて護りし城も大御代の

めぐみは文の林にぞなる

と詠んでいる。長い教員生活に、無限の感懐と感謝をこめた英雄子は、風雲急を告げる昭和一六年一月一日、九七歳をもって永眠した。

不屈の信念と広く深い学問、柔軟な想像力と爽快な精神とをもつて、日本の教育界を感化していった偉大な女教師豊田英雄子は、一方では看護学は六九歳、華道は七八歳で免許を受けるなど、自らも生涯学習を実践していた。彼女の生涯を貫く「一事敢行」の姿勢に学ぶところ、実に多大なものがある。

参考文献

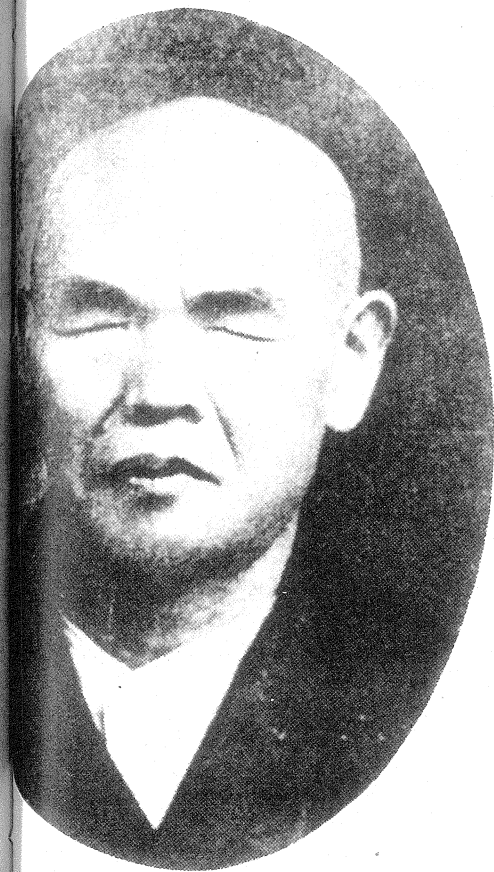
『豊田英雄子と保育資料』、『幼稚園教育百年史』、『茨城女子教育百年の歩み』、『水戸二高七十年史』

（茨城県立歴史館主任研究員 仲田昭一）



豊田小太郎・英雄子の墓 水戸市常盤共有墓地

視覚障害・聴覚障害教育の先駆者

石^{いし}塚^{づか}茂^も吉^{よし}

「目アリテ日月ノ明ヲ知ラズ」

盲者ハ目ニ盲セリト雖モ心ニ盲セルニハ非サルナリ

啞者ハ語ル能ハサルモ意志ナキニハ非サルナリ

この一節は、石塚茂吉が起草した私立下野盲啞学校設立趣意書の一部分である。石塚は、つづけてこれら視覚や聴覚に障害のある者をよく教え導けば、「知能を啓発し固陋を脱し、適当な生業を得る」ことができるだろうと述

べ、障害のある子どもを持つ父兄には、子弟を学校に入れることを勧め、また有志者には協力を呼びかけた。

ここに、本県初めての視覚や聴覚に障害のある者に対する近代的教育の設立をみるのである。

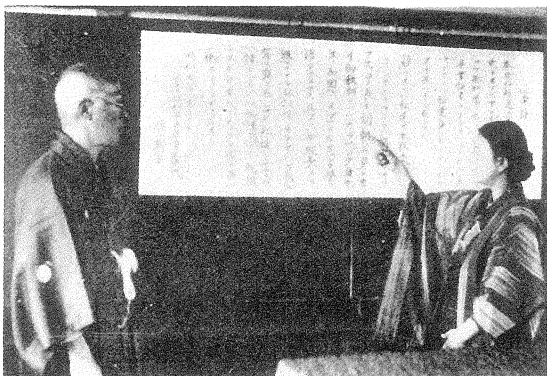
失明にも負けず

明治元年四月といえは、戊辰戦争のまっただ中で、官軍と旧幕府軍が宇都宮城をめぐる激しい攻防戦を繰り広げていた、その一日に茂吉は宇都宮町郊外の国本村で誕生した。そして五歳のとき患った病気がもとで、失明してしまった。

茂吉は突然に暗黒の世界に踏み込むことになったが、わずか九歳で鍼治、按摩の弟子入りをして、一八歳で鍼按師として独立した。

その後の一五年間、すなわち明治一八年から三〇年ころまでが彼の本当の修業時代であった。漢学者岡山信庸の静儉舎、船田兵吾の作新館で国語、漢文、地理、歴史等の一般教養を学び、宇都宮病院長大橋和太郎、のちに医師原久三郎から解剖学、生理学、病理学、診断学等の専門医学を修めた。

彼は、明敏な頭脳と旺盛な研究心を兼ね備え、何よりも負けず嫌いな性格を有していた。



手話中心時代の卒業式

視覚障害教育の動き

江戸時代の視覚障害者のための制度が廃止され、いまだ近代的教育制度が確立しない当時、石塚の勉強は全く個人の努力に負うところであって、他の視覚や聴覚に障害のある者は、わずかに師匠に頼って伝統的徒弟制度で生業をたてていた。

そのような状況のなかで、本県で初めての盲学校の設立が企図されたのは明治二一年であった。皇族、政府高官・県官、民間有力者を網羅して、視覚障害者の「學術を研究し風教を改進する」目的で本県に視覚障害者のための教育会及び盲学校を設立しようとするものであった。この発起者の一人に石塚茂吉も名を連ねていた。しかし、この会は、実際には発足した形跡がない。

視覚障害者は相変わらず学習の機会を得られなかったが、時代は進展して按摩・鍼・灸の三療もいづれ試験免許制が導入されると予想されるようになっていた。そのため、明治二九年、彼は独力で自宅に視覚障害者のために共向会を組織して彼ら子弟の研修の場を作った。

私立下野盲啞学校の設立

明治三十八年四月に、東京市で、視覚障害者の全国大会が開かれた。宇都宮市からも石塚をはじめ数名が出席したが、大会の雰囲気などから、視覚障害者のための教育機関の必要を痛感して帰省した。

大会参加者を中心に二つのグループがそれぞれ学校設立に乗り出した。一つは野州盲学校であり、もう一つが下野盲啞学校である。この下野盲啞学校の設立者の代表が石塚茂吉であった。冒頭に掲げた設立趣意書は、このときのものであるが、視覚や聴覚に障害のある者の置かれている現状を「目アリテ日月ノ明ヲ知ラズ、耳アリテ聞ク能ハズ、口アリテ言フ能ハズ」とし、学校で学ぶことによって「暗黒ナル天地ヲシテ光明ナラシメ、悲惨ナル生涯ヲシテ快愉ナラシメ」と述べている。両校は、明治三十九年二月ほぼ同時に開校した。これが本県初の特種教育機関である。私立下野盲啞学校は石塚茂吉が校長兼教員として医学科（按摩、鍼、灸）の指導にあたり、普通科はかつての恩師であり設立協力者の船田兵吾ほか下野中学校の教員が事務的に教壇に立った。船田兵吾との付き合いはその後もつづき、石塚にとつては終生の理解者となった。



大正時代の宇都宮盲啞学校

当初の生徒は一〇人ぐらいいったが、そのうち幾人かは石塚先生の家から通学した。学校は初め宇都宮市泉町にある石塚の自宅を予定したが、設立の認可がおりなかったため、篤志家の寄付を得て近所に建てられていた。下野盲啞学校と野州盲学校は二年後に合併して、私立宇都宮盲啞学校となった。石塚はここでも設立者の一人に名を連ね、生徒たちの按摩・鍼・灸の学説と実技の指導教官として大正七年まで在職した。

点字は符号にあらず

石塚茂吉が勉強熱心であったことは、弟子たちが口をそろえて述べている。毎朝三、四時には起床し解剖学等の点字書を編纂した。また、新しい鍼穴をみつけた。自宅に点字図書を多数置いて、だれでも自由に閲覧できるように、「点字図書館」を開設した。

石塚は教育だけにどまらず、視覚障害者の社会的地位を高める活動を数多く行っているが、その一つに点字投票権承認運動がある。大正一三年の総選挙で内務省は点字は符号であるとして、視覚障害者の投票権を承認しなかった。これに対して全国の視覚障害者は点字投票を認めよという運動を起こした。彼もこの運動に参加した。足利市で、この

ための関東大会が開催されたとき、彼がこの大会に参加したかは不明であるが、石塚が聴覚障害教育の創始者といわれる松田元一郎と相談して作成したといわれる「点字ハ符号ニ非ザルノ弁」では、点字は形は違ってもその用法には仮名五十音と少しも異ならず、点字投票を認めないなら「盲人ハ天与ノ選挙権ヲ行使スルコト能ハズ……日本文明ノ一大瑕疵」と述べ、「点字ハ純粋ノ文字」と主張している。

そのほか、生業でも宇都宮市や栃木県の鍼灸按摩マッサージ営業組合長を長年にわたって勤め、また、電気治療器械の発明や石塚式施灸器とか衛生キセルを考案した。

恩師石塚先生に贈る

「私には弟子は五〇〇人くらいいるよ」とよく言ったそうである。その弟子たちが大正一四年に先生の鍼灸創業五〇年、共向会設立三〇年、私立下野盲啞学校創立二〇年を祝して、感謝状と点字印刷機及び木像一体を贈呈した。木像とは、木彫の経絡人形のこと、鍼のつぼを知る人体教材である。これについて弟子の一人は思い出の記でこう述べている。「これは先生が自ら素ツ裸になり、付近の彫刻家に頼んで拵へさせたもので、高さ三尺位、



昭和初期に建てられた盲啞学校

先生に生き写しである。大兵肥満にして二十数貫あつた壮年時の俤のしのばれる逸品である」。

石塚茂吉は、それを私せず宇都宮盲啞学校に寄贈した。生徒が鍼を勉強するとき像に触れてつぼを知るのがあるが、それは石塚先生に触れることであり、木の温もりから先生の教えが直接伝わってくるようにも感じられるのであった。

多くの弟子たちに見守られ、昭和八年、享年六六歳の天寿を全うした。

石塚茂吉の時の種は、やがて足利盲学校とともに県立代用学校から県立学校に移り、現在は、県立盲学校・県立聾学校としてつづいて実っている。石塚を模した木像も、県立盲学校に今でも残っていて、児童・生徒の勉強をあたためる歌がこだましている。

校庭に元氣な歌声がこだましている。

【参考文献】

- 栃木県立盲学校創立65周年記念誌
- 同 八十年誌
- 栃木県立聾学校50周年記念誌
- 同 七十年誌
- 石塚保之「故石塚茂吉回想録」
- 栃木県連合教育会編『教育に光を掲げた人びと 第二集』田上隆司「本県特殊教育の創始者 石塚茂吉先生」
- (栃木県立文書館副主幹 仲田凱男)

風土に根ざした教育の推進 「知行合一」「実践躬行」の人

田部井 鹿蔵



渋川郷学を教育の理想に

この地の人はせまい所では人に先を譲る
しかし、大道では決して人後に落ちることを
欲しない
ある時代のこの國の良さを
渋川の人が受け継いでいるのは
郷儒堀口藍園翁の感化による所が大きいと
思われる

渋川駅前にあるこの碑文は、明治の前期に
この地方に大きな感化を及ぼした漢学者堀口
藍園の遺徳を顕彰したものである。

江戸時代、渋川は江戸と越後を結ぶ三國街
道の宿駅であり、また、谷口集落として開け
た市場町でもあった。この土地に一八世紀後

その生き方と学問に人間教育の理想を求めた
のである。

渋川郷学に関する鹿蔵の研究は、『隠士堀口
藍園の尊皇精神』、県教育会誌に連載した『藍

半から一〇〇余年にわたって実学を尊び進取
の気性に燃え、郷党の教化や郷土の発展に尽
くした人々がいた。吉田芝溪、小暮足翁、高橋
蘭斎、堀口藍園等である。師弟関係で結ばれ
たこの人々の学風を後世「渋川郷学」と呼ん
で、地域の教育の基本においているのである。

大正後期から昭和初期にかけて、渋川郷学
の先覚の業績を掘り起こし、渋川郷学を再び
町民の心によみがえらせ、地域の教育の中に
積極的に取り入れたのが田部井鹿蔵である。

大正七年一月、鹿蔵は群馬郡渋川尋常高
等小学校訓導兼校長として着任した。当時は
大正デモクラシーを背景として、新しい教育
思想や教育実践が相次いで現れ、試みられた
時代であった。一方、群馬県では明治四四年
に出されたいわゆる「四大教育方針（就学出
席の督励・学校基本財産の増殖・指導内容の
充実・社会教化）」の実施過程でもあった。こ
の方針の第四項「小学校ヲ以テ教化ノ中心タ
ラシムベシ」は、社会教育の普及発展のため
に小学校が中心的な役割を果たすように指示
されたものである。

このような時代にあつて鹿蔵は、公職多忙
の中で渋川郷学の研究にも意欲的に取り組ん
だ。渋川の地域教育の人脈である吉田芝溪や
堀口藍園などの人物像や生涯を調べた結果、



渋川駅前にある藍園顕彰の碑

堀口藍園先生、芝溪吉田友直先生など多
数の著作となつて残っている。著作のほかに
も、これらの人物とその業績についてたびた
び講演をしたり、ラジオで放送したりして広

く、県下の人々に知らせるように努めたのであ
った。

鹿蔵の渋川郷学への傾倒ぶりはたいへんな
もので、自分の子や孫たちを、あるいは青年
団員を連れてこれらの先覚者の命日の墓参
や墓の掃除、墓標を建てて人々に知らせるな
ど「知行合一」「実践躬行」を率先して実践し
たことに表れている。

学校経営の中では「郷土に立脚したる教育」
を掲げて、各教科の教材を郷土化するなかで
郷土の理解や愛護を目指したのである。指導
事項の「郷土の偉人尊敬」では、職員・地域
の人による吉田芝溪・小暮足翁・高橋蘭斎・
堀口藍園の講話があげられている。さらに、
これらの人々の年回参列なども計画され、墓
前通行の際に礼拝の習慣化を図るなど郷土の
先覚者への崇敬の念を養おうと努めていたこ
とがうかがえるのである。

女子教育への取り組み

鹿蔵は女子の教育に強い関心を持っていた。
二五歳の時、邑楽郡教員会の論文募集に「県
下女子教育の改善発達を図る方法」で応募し
第一等に入選した。彼の主張した女子教育は
「儒教と西洋道徳を採長補短し、これを日本
の実情に調和させる」という主旨のものであ
った。

渋川尋常高等小学校長として着任して間もなく、鹿蔵は町立実科高等女学校の設立に着手した。当時、渋川周辺には女子の中等教育を施す学校がなく、前橋・高崎へ行かなければ勉強ができないのが実状であった。そのため、鹿蔵は町長羽鳥年太郎を説得し、町議会、郡議会の賛同を得て、県庁に日参するなど奔走した。この努力で渋川周辺の人々の長い間の願いがかなえられ、大正九年渋川町立実科高等女学校が実現したのである。

鹿蔵は小学校長で初代実科高等女学校長を兼務し、「質素・勤勉・正直・健康」を教育方針として学校の経営にあたった。体操を重点に位置付けるなど当時の女子教育としては進歩的な経営方針を示していた。

青年はひたすら勉強せよ

鹿蔵は漢学の造詣が深く儒教的人生観に立って自分を律し、高い識見をもって教員の資質の向上に努めた。彼自身が実践して体得した信条で、県下の教員によく知られている教員訓は次のようである。

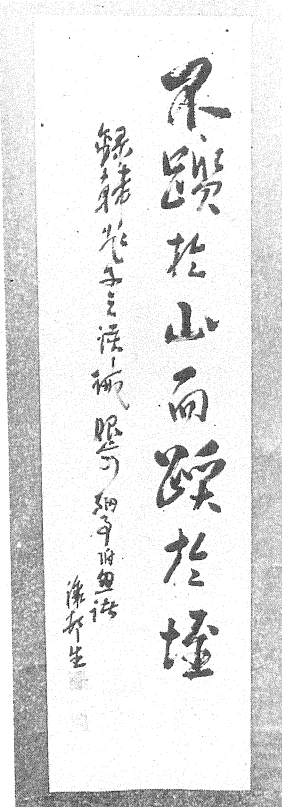
青年教員は主として勉強すべく、中老の先生はあげて之を助勢し、中年教員は主として働くべく、老年教員は主として徳を成すべし。

彼は部下の教育技術の向上を目指して授業

研究会を連続で実施したり、学期ごとに個人研究の発表会を行ったりして、仲間同志互いに励まし合って向上するように仕向けている。鹿蔵は部下や青年たちのめんどろをよくみ、また、人を見る目も持っていた。教職で失敗した者や、未熟な教員も、彼の下では立派にその力を発揮したと言われている。

社会教化

鹿蔵は社会教化の一環として成人教育にも尽力した。青年会・処女会の会長となり「世の中に迷惑をかけない人間になれ、世の中に少しでも役立つ人間になれ」をモットーとして、雄弁大会・バザー・敬老会等多くの活動を組織的に行った。後に、当時の青年会員の一人は次のように述懐している。



鹿蔵の揮毫 号は穰郵

ある時、(鹿蔵)先生の家を訪れたら、町の先覚者吉田芝溪先生のお話で一夜をあかした。その後、芝溪先生の墓が非常に荒廃していたので、吉田家の了解を得て先生と元町青年会で墓地の掃除をした。墓標を立て柵をめぐらした。作業終了後芝溪先生の学問と芝中開塾の苦心談を聞いたことが懐かしく思い出される。(略)

鹿蔵の業績は以上のほかにも町立図書館、町立幼稚園の創設に尽力し、それぞれの長を兼ねるなど多岐にわたたり、二十四年余渋川町の教育を一身に担っていたのである。この間にも学事会長や教育会長を歴任し、郡・県の教育の発展に貢献している。

教員の待遇改善

人一倍正義感の強い鹿蔵は、普通教育者の地位の向上と待遇の改善にも大きな役割を果たした。従来小学校教員の給与は市町村の負担であったが、大正末から昭和初期にかけての経済不況のため、給与の遅配や欠配が生じていた。彼は「職責重大なるものが待遇不安に置き放しになっていることは、国家的にも社会的にも不合理」であると主張して、教員給与を国庫負担にするために熱心な運動を始めたのである。

昭和八年、第一〇回全国連合小学校教員大会で、鹿蔵は小学校教員の俸給は国家支弁でなくてはならないと訴えた。そして、翌九年から一〇年間全国連合小学校教員会副会長を務める中で、「当然の主張は堂々と主張すべきである」として、常に先頭に立ってこの運動を進め昭和十四年にその実現をみたのである。

鹿蔵の生い立ち

田部井鹿蔵は、明治一三年(一八八〇)一月一二日渡良瀬川に沿う邑楽郡渡瀬村(現館林市)足次に生まれた。高等小学校卒業後、



顕彰委員会によって建てられた鹿蔵の胸像

館林曳尾義塾(私立中学校)で漢籍・英語・数学を学び、後に、祖父平吉の期待を担って群馬県師範学校に入学する。明治三四年八月同校本科を卒業し、邑楽郡大箇野尋常高等小学校訓導となった。

の協力を取り付けて復旧にあたり、予想外に早く授業を再開し、町民の心を強く打った。大正二年(一九一三)、三四歳で県下でも大郡の群馬郡視学となる。公正で教育の理論と実践に精通していた彼は、全郡各方面の信頼を得て教育諸事業の革新を図ることができた。しかし、大正五年七月、部下の失敗の責任をとり郡視学を依願免となる。

だが、すぐに懸望されて同年八月佐波郡玉村尋常高等小学校訓導兼校長となった。毎日の授業の充実による教育実践の深化、教育者としての学識向上、体操の奨励等を教育方針として学校経営にあたり、この時期に「玉村教育」の礎を築いたのである。

大正七年、渋川尋常高等小学校へ着任してからの主な業績は前に述べたとおりである。昭和一八年に校長を退職した後は、県教育会主事を、戦後は県選挙管理委員、退職公務員連盟理事長(県)、同常任理事(全国)などを務め、昭和二三年に公選による県教育委員に当選、翌年県教育委員長となるなど県教育行政にも貢献した。

昭和三〇年五月、正五位に叙され勲五等旭日章を授与され、その年の六月、七六歳で病没する。

昭和四二年、田部井鹿蔵先生遺徳顕彰委員会によって、渋川市立北小学校に胸像が建つ。

(群馬県教育センター第一研修部長 須藤新蔵)

先生の存在が村の誇り 不言感化の教育

増田 玄次郎



生い立ち

埼玉県秩父郡吉田町立吉田小学校には、校舎を背にし校庭を見渡すように、同校初代校長増田玄次郎の胸像が立っている。先生の遺徳を偲んで、昭和二十六年（一九五二）に増田校長顕徳会が建立したものである。

増田は創立以来三二年間にわたって本校の校長兼訓導を務めたが、村の人々は「この吉田にはとりたてて誇れるものは何もないが、増田先生がおられることだけが、たった一つの誇りである」と語り、他町村から転住してきた者は「この村に住んでいれば子どもが増田先生に教えて貰うことができる幸せがある」と言っていたという。

増田玄次郎は元治元年（一八六四）群馬県館林町の増田禎吉郎氏の次男に生まれた。家の都合で、埼玉県北埼玉郡三田ヶ谷村の叔父のもとで厄介になって少年時代を過ごした。生来の資質に恵まれ学問に志したが学資の途なく、明治十一年（一八七八）一四歳で北埼玉郡今泉小学校を卒業すると、地元の小学校の代用教員になり、学問を続けながら学資の蓄積に努め、同十九年（一八八六）二二歳で埼玉県師範学校に進んだ。

二五年目には、県視学就任の内諾を求められたが、これも辞退した。

増田は「此の我儘なる村夫子の個性を提げて本県教育界の中心に出て官海の人とならば、上は人の容るる所とならず、下は人を容るること能はず、衆目具胆の中に立ちて茲に生の短所を暴露し、半文の価値なき醜き形骸を止め、遂に個性の己を殺し、推挙の厚意を傷付けるに至るや必然なり」とも、「二十五年の知己を有する現在地、寧ろ埋骨青山の感あり。或は一個の村民として余力を村教育の一部に尽くし、以て村民多年の値遇に報うるも不可ならず。切々の哀情、暮夜中を沾す。更に思ふ、十四の同僚と、天真爛漫六百の愛児と、幾千百の卒業生とを捨つるは衷心忍びざるものあり」という心境であった。

不言感化の教育

増田教育の真髓は「不言感化」の教育である。「百の説法より一の実行尊く、百の訓言より一の教師示範に真価あること忘るべからず」という率先垂範の教育である。

ある教え子は「先生の目から見たら、多くの人は皆物足らぬ感じがしたろう。子どもに對しても、もつと叱りたかったことが多かったろう。先生のお小言はあるいは先生として最小限度に言われたものではあるまいか。そ

選んで入学させたが、得点の関係上、本入学を許したのは増田少年一人であった。
在学中は、僚友から「お爺」と敬称されたが、級風振作の中心となり、教師たちからは人格高尚な模範生として敬愛された。
常に成績抜群であったが、あるとき唱歌の得点がよくなかった。そこで増田少年は散歩中でも友人たちに範唱を求め、懸命に練習して、第二学期には満点を得たのであった。
師範在学中の学費は大部分自己の蓄財で賄ったが、不足分は卒業後に父親に返金した。母親は「学資を親に返金する者がほかにあるかね」と言ったという話も残っている。

吉田村教育一筋の生涯

明治二三年（一八九〇）抜群の成績で師範学校を卒業したが、そのころ、下吉田村では高等小学校創設のため、師範出の優秀な教師を求めて、増田に白羽の矢を立てた。

増田は既にほかに赴任のはずになっていたが、これに応じて下吉田小学校の校長兼訓導として赴任した。時に二七歳。以来、三二年間にわたり、教職生活のすべてを吉田村の教育に捧げ、他を顧みることはなかった。

この間にも、他町村や附属小学校から招聘の声がかかったが、そのつど断り、就任して



埼玉師範学校在学中の教え子たちと先生

の心の中、腹の内では肝を煎り、我慢もされたのだろう。そうして実行自ら勤め積み、もって範を示されたのではあるまいか」と述べている。

また増田式指導法の特徴は、予習・復習を徹底し自発学習を重んじた。その指導ぶりは厳格で、一度やらせようとしたことは必ずやらせた。ちなみに、吉田小学校の卒業生の字形筆勢はみな酷似していて、文字を見れば増田の教え子であることが分かったといわれた。彼の指導はそこまで徹底していた。

しかし増田は、子どもにやらせるだけでなく自分でも人の数倍の苦心をした。添削物を片付け終わったら、東の空が白んでいたということも珍しくなかった。

また日ごろから自らの行動を見守る模範となるように振舞っていた。教え子の字が増田の手跡に似ていたというが、今も学校に残る増田自筆の学校沿革史を見ると、教科書のよう端正な楷書で綴られており、教壇に立っていても、教壇から下りていても、生活態度は不変であったことを物語っている。

卓抜した経営理念と実践

明治中期、改正小学校令が実施されたころは県下一般の経済状況は困窮を極めていた。そのため教育制度にも不満の矛先が向けられ

ムルモノニシテ、之が為ニ保護者ノ負担ヲ増サザランコトヲ期スル」ものであった。

この積立ては実に昭和六〇年（一九八五）まで続けた。戦後、一円に値上げしたが、預金額は利子も含めて五七万円余になった。

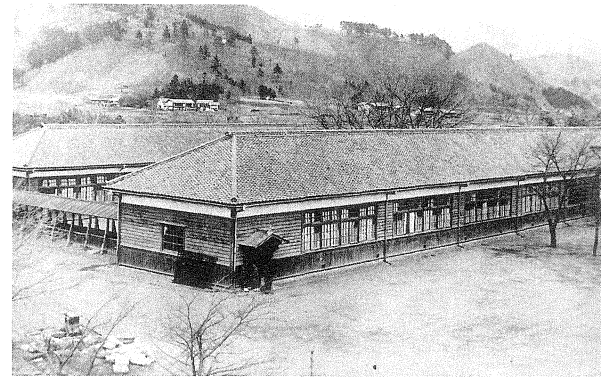
学校は平成元年、地区指定の体育研究を期にこれをもって体育用具を購入したという。

また、増田は「自炊会」なる教職員の親睦会を作ったが、当時の記録を見ると、源平二手に分かれ、それぞれが野菜や肉や酒などを持ち寄って、工夫を凝らして自炊料理を競いつつ親睦を深めたようである。和気あいあいの雰囲気は伝わって来るようである。ちなみに、自炊会は今もお連綿として続いている由。

先生の人柄と壮烈な最後

教え子のだれもが「増田先生といえば『こわい顔』を思い出す」という。つまり、増田は「おっかない先生」であった。洋服姿でキラリツとして、寸毫も優すことのできぬ風貌で一語にも威厳がこもっていた。しかし、各地に旅行したときには、寸時を利用して、その地にいる教え子を必ず訪ねて激励するなど、内には温かい教育愛が燃えていた。

だから教え子は「寛いだときの先生は格別



吉田小学校旧校舎（昭和2年3月撮影）

大衆の一部には、小学校の一時休業や学校費の半減を望み、教員の瑕疵を責めたり、学校の不始末を詰つたりする者もいた。

こんな事態に際して、増田は「改正小学校令に関する責任は専ら教育行政家にあるが、具体的なことについては教授者の運用如何にも半分の責任はある」とし、これに処するに「学理を以て實際を律せんとすべからず、咄嗟の間に成功を収めんとすべからず、一失手を拱して吾事止めりと断念すべからず」と覚悟し、「須く前後を慮り、謹慎事に従い、寸伸尺出着々その歩武を進むべし。語を易えて言えば、誠心誠意、我が天職に安んずべし。この精神に堅からばその功期して俟つべく……」と自戒した。

増田式経営の実践規範は、周到な準備と、熱烈な実行と、周密な整理をすることであった。案なくして事をなすことはなく、事を行う場合は完全な遂行を期し、業務終了後の整理反省はきちんと行つて次の企画の基とする。つまり、plan-do-checkのマネージメント・サイクルを徹底したのである。

増田はアイデアマンでもあった。大正七年（一九一八）から学校の基本財産を積立てるために、児童に毎月一銭を拠出させることにした。「此ノ一銭ハ、児童ノ不時ノ小遣銭又ハ学用品ノ節約ヨリ生ミ出シタル銭ヲ拠出セシ

よしと啼く声しすこゝろ影寒く落葉の霜に照らす月かな
馴れぬれば夜半の寝覚めに奇つ
落葉と友の心地こそすれ



校庭に立つ増田次次郎胸像と歌

いづの間に萌えやそあけん昨日今日
野辺の若草色つきにけり
海人か子と柴刈り子とと教草
つなつて遊ぶ世となりけり

写真提供：吉田町教育委員会委員長 坂本新太郎氏

の笑顔で、時に哈哈大笑されると皆の笑いも誘った：公人姿の先生と家庭におけるお父さんと、両面をもっていた」とも言っている。私人としての増田は、人生万般・四季折々の歌を詠み、友人を大切に家族に交際をし、家庭もまた大事にした。「今日は障子張りをして遊び。障子張りなどは遊びのうちだ」などと言つて家事も厭わなかった。

大正二年（一九一三）村立図書館に書籍一四一冊を寄贈して木杯一個を下賜されたが、以後毎年のように五〇円ないし二〇円の私財を図書館に寄付する篤志家でもあった。

大正十一年（一九二二）五月七日、秩父郡西部講習会が小鹿野小学校で開かれ、増田はその講師として衛生講話をしていた。

講話が一五分ほど進んだとき、突然倒れ、宿直室に運ばれた。増田は「半身不随」やられた。増田の一生も終わった。残念！」と叫び、また、「進行々々ノ会の進行を……」と最後まで講習会の継続を気遣っていた。

やがて、医師が駆けつけて百法手当を尽くしたが病状は悪化して昏睡状態となり、翌朝自宅に移された。吉田小学校の西の県道に七五〇名の教え子が不安の眉をひそめ快癒を祈りつつ迎えたが、八日の午前一〇時ごろ永眠した。

享年五八歳。正八位勲八等に叙せられた。

（与野市教育委員会教育長 岩上進）

土に生きた教育者

塩田 せつ



塩田せつと家政女学校卒業生

一、布鎌 いもしま
もろこしだんご

千葉県と茨城県の県境、利根河畔の千葉県印旛郡布鎌村（現在、栄町）は、以前は、このようにいわれていた。

「いもしま」とは、四囲を利根川とその分流によって囲まれた島状の地形で、その形状が芋に似ていることにちなむといわれ、また、「もろこしだんご」とは、水稲単作の村でありながら、住民の主食がもろこしなどの雑穀であったからだという。

地勢上も、交通的にも、周囲から孤立した僻村であり、経済的、生活的に恵まれぬ小村であった。明治末期、郡内で、唯一、荷積み馬車がない村であり、また、専業の商工業者がいない村であった。

加えて、利根川の氾濫原に立地していた布鎌村は、度重なる水害に悩まされ続けていた。明治四三年八月の大洪水の際には、堤防が決壊し、濁流が村内全域に溢れ、小学校の床土七八cmに達し、滞水は一月以上におよんだという。その間、同校は臨時休校を余儀なくされ、もちろん、稲作は壊滅した。

大正期の布鎌村は、「疲弊農村」であった。

しかも、その疲弊度は、第一次大戦後の慢性化した経済不況の中で、一層深刻さを増していった。

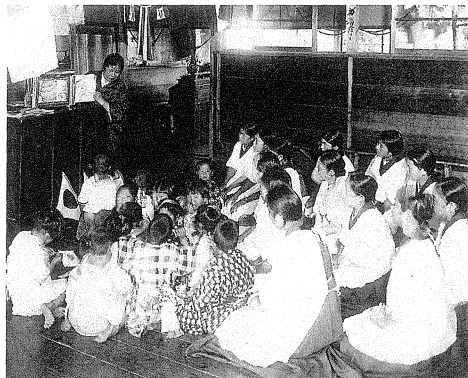
二、兔の村

大正一一年四月、村の小学校長として、小林孟雄が着任した。近在の大森町（現在、印西町）出身、年齢二八才、初任の校長であった。

彼は、学用品を満足に買い備えられない多くの学童を目にして、兔の飼養を思い立った。大正一二年一一月校内に養兔部を作り、児童たちに飼養させた兔を東京医科大学及び東京神田須田町の免料理店へ納入し、収益を学用品の購入や貯金に充てさせた。学校に出入りする村の青年男女にも免の飼養を勧め、さらに一般農家にも広めていった。飼料は、周りの提防や田の畔道に無尽蔵であった。一四年、同村三九六戸のうち三四九戸が免を飼養し、頭数二三八三頭、一万円もの収入をみるまでに至り、新聞が「免の村」として紹介した。また、他村から購入していた野菜の自給を図り、学校を通じて、栽培を奨励した。こうして、大正末期には、布鎌村は、県当局から、村の立直しを自力で達成した「模範的農村」

との評価を得たのであった。

当時の布鎌村は、「学校が村の教育文化は勿論産業の中心であり、「村全体が学校を中心として動いていた」感があつたという（岩井喜久衛氏記）。その「学校」にあつて小林校長の實質的な手腕となり、その活動を支えたの



紙芝居を演ずる塩田せつ（家政女学校で）

が、訓導塩田せつであった。

三、女の力

塩田せつは、明治二〇年、布鎌村の隣町、木下町竹袋の飯田家に生まれた。薬局を営んでいた生家が経済的に苦しかったため、「官費」

が給費される千葉県師範学校に進み、三七年に卒業した。日露戦争が勃発した年である。成田尋常高等小学校訓導を経て、母校の附属小学校訓導へ転じたが、四一年、布鎌村出身で、岩手県宮古水産学校教諭の塩田愛隣と結婚し、所帯を宮古に構えた。しかし、彼女は、家庭にこもることなく、宮古女子尋常高等小学校訓導として、教職の道を続けた。四三年、夫が北海道小樽水産学校へ転動した。彼女も小樽区豊徳女子尋常高等小学校に転じた。宮古、小樽時代の彼女の足跡は、今、知る術はないが、この異郷における一〇年余の教職経験が、彼女にとって、得難いものであつたことは、その後の歩みが物語っている。

第一次大戦が終わった大正八年四月、夫愛隣は、当時猛威をふるっていた流行性感冒により、急逝した（享年四〇才）。彼女は退職し、年端のいかない一男三女を連れて、布鎌村の亡夫の実家へ帰った。彼女は、義理の両親に仕え、一男三女を養育しながら、同年九月、布鎌尋常高等小学校訓導となり、再び教職の道へ戻った。彼女にとって、最大の苦闘の時期であつた。後に、出産前後の女教員の身の上を思いやり、同僚の女教員の同情と親切が、「どんなに嬉しい」ものであり、「温い人の情」を感じさせるものであるかと述べ、「私たちは苦勞してはじめて人になりまた人が分かるのである」と、記したのも、実感であつたこと

と思われる。

布鎌小時代の彼女が、当初、熱心に取り組んだのは、低学年の学習指導であった。志垣寛の低学年の指導観に共鳴し、また、奈良女高師附属小の「合科学習」に強い関心を寄せると、大正期の新教育運動の理解に努めた。彼女自身の授業観が児童中心主義に立つものであったことは、彼女の授業記録「読方教育法の実際」にうかがえる。

このようななか、彼女の活動の重点は、次第に農村の青年子女教育に移っていった。「疲弊農村」布鎌村を教育の力によって更生しようとしていた小林校長は、大正一二年、自校に併設されていた農業補習学校に女子部を設けた。翌一三年九月、彼女は、農業補習学校助教諭を兼任し、女子部の指導を委嘱された。また、女子部の生徒が村の処女会（後の女子青年団）の構成員でもあった関係から、処女会活動の指導助言にも当たった。

大正一四年、布鎌村処女会は印旛郡聯合処女会の表彰を受けた。翌一五年、布鎌農業補習学校が県知事表彰を受けた。さらに、昭和三年には、布鎌村女子青年団（前年処女会から改称した）も県知事表彰を受けた。このように、布鎌村の青年子女教育の成果は、公私ともに高く評価されたが、それは、小林校長の指導性の發揮と彼女の実際の指導に負うところ大であった。彼女自身も、昭和二年、

黒柱としての主婦を育成する学校であった。当時の農会幹事で、同学校校長を兼ねた山崎時治郎は、塩田せつを招き、指導の実際面を委ねた。彼女は、同校の使命を、「真に農業を理解し、農村婦人としての立場を自覚し、自ら家庭実生活の改善発展に努力せんとする能力及徳操の涵養を、より具体的ならしめん」ことにあるとさえ、農業を嫌ひ、都会生活に憧れる農村の子女を、農村に定着させることを目指した。

彼女は、昭和三年九月の着任以来、二〇年三月に退職するまでの一六年余を、教諭兼舎監として精励した。全寮制の下で、学校全体を一大家族に擬したなかで、彼女は、寮生にとって、「我等のお母様」であった。同校の校訓「ニコニコ イキイキ イソイソ」と呼ばれ、腰軽くは、正に、彼女のパーソナリティーそのものであり、そのふくよかな風貌、こまやかな気配り、「音律あるさわやかな声」等々、「慈母」のイメージで、慕われた。

世界大恐慌、満州事変、日中戦争、太平洋戦争へと、世相の激変が続く中で、家政女学校の教育内容にも、また、彼女の言動のほしほしにも、戦時色が次第に濃く表れていったが、彼女は、一貫して、生徒の「母親」とし

千葉県教育功労者表彰を受けた。表彰者中、女性には彼女のみ、また、訓導も彼女一人であった。その表彰理由は、一に「教育ノ地方化ニ努メ……常ニ実践精神ヲ示シ」であった。

補習学校、処女会の指導において、彼女が力をいれたのは、料理と裁縫であった。村の養育事業と関連付けた免肉料理（免ライスな



農作業へ向かう家政女学校生徒

ど）や農業補習学校の実習地で栽培した野菜類を活用した料理などの工夫と実習に力をいれた。裁縫では、どてらや帯を、美化・合理化を観点に改良し、村民の縫物を請け負って、現金収入の道を回り、収入の一部は学校の共同貯金、残りは各人に貯蓄させるなど、

存在し続けた。時代の荒波の中で、もがき、悩んだ卒業生たちにとって、彼女が大きな心の支えであり続けたことは、卒業生らの数々の音信の中にかがうことができる。その卒業生のほとんどは、無名の農村の主婦となり、戦中、戦後の千葉県の農村を支えたの



蘇我時代の家政女学校と塩田せつ（左から二人目）

である。

昭和二〇年三月、彼女は退職して、布鎌村に帰った。義母を世話し、その死をみどり、彼女もまた、昭和三年一〇月、布鎌の土に帰した。享年七二才であった。

昭和三六年四月、家政女学校は不慮の火災により全焼し、翌年三月、同校は廃校のやむ

単なる技術的指導にとどまらないものであった。

また、「新らしき時代に必要なる婦人としての資格を涵養するため」、読書会、講演会をしはし開いた。地元小学校職員（彼女もその一人であったらう）による「女の力」、「子女の教育」、「品性の修養」、「一事實行」、「嫁と姑」などのほか、婦人運動家市川房枝の「婦人の力」、社会派のキリスト教文学者沖野岩三郎の『新らしき家庭教育と婦人の責任』、東京農業大学教授沢田五郎の「農村問題小観」などの講演会を開いている。

四、ニコニコ

イキイキ イソイソと……

金融恐慌で明けた昭和初期、千葉県の農業界は、疲弊した農村の振興策が大きな課題であった。昭和三年、千葉県農会（現在の千葉県農業協同組合の前身）は、「興村振業」、「農村生活改善」を教育の力で実現したいとして、農会立家政女学校を設立し、翌年一月、千葉県蘇我町（現在、千葉市内）に開校した。「蘇我の花嫁学校」（昭和一八年山武郡土気町に移転後は、同様に「土気の花嫁学校」と呼ばれたが、いわゆる「良妻賢母」を育てる一般的な花嫁修業の学校ではなく、農家の大

なきに至った。当時の日本は、高度経済成長期を迎えつつあり、千葉県も、農業界からの脱皮、工業立県を目指していた。農業県千葉を支える人材の育成を使命としてきた家政女学校の廃校は、一つの時代の終わりを象徴する出来事であったといえよう。

廃校後、その組織と生徒は、千葉県が設置した千葉県青年学国家政部に引き継がれた。同国家政部は、その後、千葉県農村青年研修館農村青年学国家政部から同研修館農業高等学校国家政部を経て、今日の千葉県農業大学校専修科に至っている。

その間、昭和四八年七月、かつての家政女学校の所在地（千葉市土気町）に、教子約一一〇〇名の手になる大頌徳碑が建立された。同碑は、その後、千葉市大金沢町にある千葉農業大学校専修科の構内に移され、現在も、彼女の余徳を伝えている。

なお、本稿をまとめるに当たり、主に、次のものを参照した。

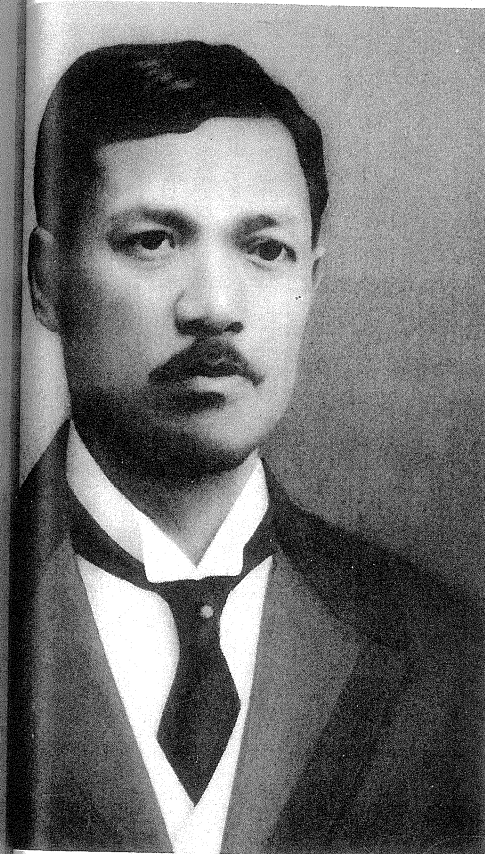
- 千葉県農村青年研修館「館史—家政女学校・農村道場からの発展—」
- 岩井喜久衛「小林孟雄先生—野武士的な存在（印旛三羽鳥の一人）—」（千葉教育二二一号）
- 吉井孝次郎「元県農会立家政女学校の塩田せつ先生」（千葉教育二二五号）

（千葉県総合教育センター研究指導主事 山本直彦）

私は戸倉の士となる

村と子どもたちへのひたむきな愛

正田浩四郎



荒廃した村

東京の西の端、五日市町。その風光明媚な自然環境で、日曜日ともなると、都心や近郊の人々が一時の安息を求めに来るこの町は、明治一四年、すでに、民衆の手で民主憲法起草（五日市憲法草案）されていたのである。

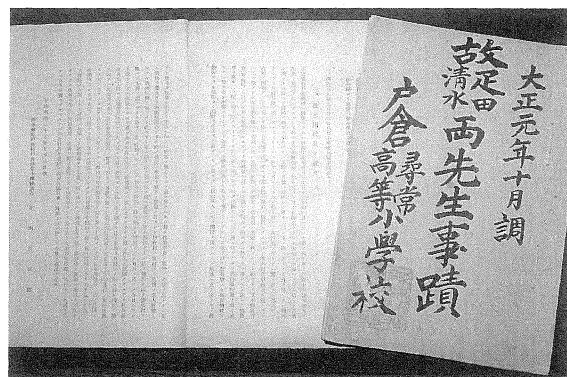
その町から奥へ行きつくところ、戸倉村。林業で栄えたこの村も、当時、折からの経済不況（松方正義＝明治・大正の政治家。大正一四年大蔵卿となり、紙幣整理、日銀の設立、金本位制の実施など日本資本主義の発展に尽力）によるデフレ政策のあおりで村全体が苦境にさらされていた。役場は腐り、学校は朽ち果て、村の財政は、極めて困窮した状態であった。

村の財政混乱と村人のすきんだ意識が頂点に達しているとき、正田は赴任してきたのである。

貧窮を支えた教育愛

村がこうした状況の中、正田の給料も一〇円の約束が五円しか支払われず、やがて、その五円さえも支払われず、給料の欠配が三年間も続いた。

さらに、正田には、郷里（兵庫県）に残した父親があり、毎月三円の仕送りをしなければ



祝文

殉教の門出

「お気の毒なこったよ。あの校長さん、この村のこと何もお知りにならねえから、大方、こんなよいところはねえ、と思つてござらっしゃるだろうよ」。

村の学校に転任してきた正田を道で迎えた村人たちは、ため息まじりに話すのであった。時は、明治一七年五月三十一日。県から村の学校の訓導兼校長として任命された正田浩四郎は、この年、三六歳。手にすくいたいほど清らかな秋川の流に沿った道を、意気揚々と、妻のふく子、一人息子の盛一とともに、人力車の上であった。所は、当時の神奈川県、今の東京都西多摩郡五日市町戸倉、戸倉小学校である。

しかし、坂道を登りつめた所で降ろされた正田は、目を疑った。門もなければ玄関もない。一棟の古い校舎らしきものは、壁は落ち軒は傾き、あばら家同然だった。

「これが学校か？こんな学校が日本国中にあるのだろうか。うゝむ」。

正田の苦しみの第一歩は、こうして踏み出された。

はならなかったため、正田の生活は貧窮のどん底であった。食べるために、自分の服、書籍はもとより、妻の持ってきた着物も質屋に入れなくてはならなくなった。一家の生活は、妻の仕立て物の内職のわずかな収入の上に成り立っていた。

しかし、一家が瘦せ細っていく生活の中にあっても、正田の意気は少しも衰えなかった。むしろ、正田の教育への情熱は、火のごとく燃えていった。教壇に立った正田は、いつも子どもに向かって言った。

「早く大きくなって、この荒廃した村を昔の姿に取り戻してくれ」。

正田の熱意に強く心打たれた子どもたちは、懸命に勉強し、その結果は、めきめきと現れた。地図もなければ歴史の掛け図も実験道具もない学校だったが、正田が赴任してきてわずか一、二年の間に、貧乏村の貧乏学校の子どもたちの成績は、県下で二、三番といううりっぱなものになっていった。

理想と現実のはざま

正田の苦境を知る隣村の校長や同校の清水訓導は、他校への転任を勧めた。しかし、正田は断り続けた。

そんなある日のことである。内職をしていたふく子が縫い物を置いて真剣に言った。

「あなた。どうぞ思い切つて転校してください」。

い。これまでやってきましたが、もう……。

この盛一の行く末を思うと……」。涙に声を詰まらせた。この数年、貧しい生活のために、栄養不良で顔色が悪く、年よりも小さく見える盛一を見つめる足田の胸にも、熱いものがこみあげてきた。理想と現実のはざまに揺れ動く心。

しかし、足田はそれを振り払うかのように言った。

「私には六〇人の子どもがある。その子どもたちを捨てて、私にどこへ行けというのだ！みんな、この私が魂を打ち込んで育ててきた子どもたちなんだ。私は教育者だ。先生が血みどろになって教育して、それに答えぬ子どもなんかあるものか！」

足田には、妻の苦しみが痛いほど分かった。

『……日々教場二出デテ生徒二向ヘバ、彼等ノ無心ニシテ最モ愛スベキハ、却テ授業中自ラ胸中ノ苦惱ヲ忘レシメ、愉快ヲ覚エタリ、余、断然決心シタリ、此最愛ノ生徒ヲ棄テ、他ニ赴カンヤ……』(明治二十七年、学校増改築の際の足田の祝文から)

なおも続く苦悩

それから後、生活費を稼ぐため、毎朝暗いうちから授業の始まるまでの間、放課後、翌日の授業の準備を終えてから日が暮れるまでの間、半里の山道を炭運びをした。さらに夜

ス、況ンヤ一泊スルニ於テヲヤ。事アルニシテ、悄然星ヲ戴キニツ塚ニ抽ヲ還ラスコトアリキ……』(前出の祝文から)

「先生のため、村のために起て！」

三年、五年、七年。やがて、子どもたちは青年になり、足田の蒔いた種が、教え子たちの胸の中で実を結びつつあった。

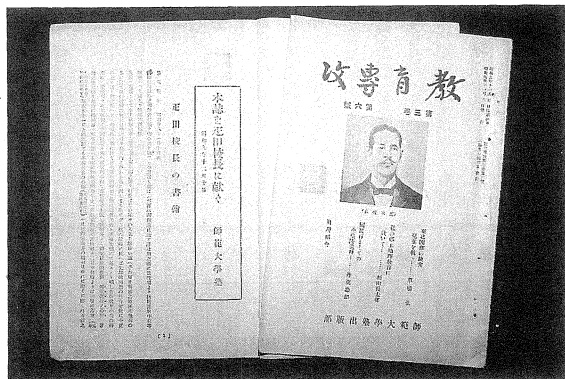
青年会が結成され、村の改革に乗り出した。もちろん、足田は、喜んで青年会をも指導した。三十余名の男女青年会員は、明治二十二年の町村制実施を機会に、翌年四月、村政研究会を組織し、村人に村政の改革を説いて歩いた。この青年たちの熱心な活動は、村人の自覚を呼び起こし、二五年三月に行われた村会議員選挙で、優れた青年会員が多数当選した。そして、足田の教えを受けた萩原角左衛門が村長に推された。

村の改革は一気に進んだ。でこぼこ道がりつばな村道になり、役場が新築され、学校も増改築され、掛け図も実験道具も、オルガンも机もいすも整えられた。二十七年一〇月三日、足田は歓喜に震えながら、祝文を読み上げた。だが、村が発展の一途をたどる中、明治二十九年九月二二日、足田は心臓病のため、戸倉の露と消えた。

「私はもうじき、戸倉の土となる。私のやつ



昭和39年に新築された校舎



足田のことを載せた雑誌

は、自宅でわらじを作った。それで、二〇銭ほどになった。このわらじは、当時、「先生わらじ」と言われて珍重され、昭和初期まで戸倉村の語り草となった。

こうしてさらに二年たち三年たった。足田の身体は、少しずつ蝕まれていったが、村人は依然として気付かなかつた。自分の身体や一家を犠牲にして働く足田に、一文の月給も支払われなかつた。けれど、足田は一言も不平を言わなかつた。見るに見かねて、子どもたちが手助けしようとしたが、それを、いつも優しくしりぞけながら言うのであった。「勉強だ、勉強だ。早く大きくなれ、大きくなれ」。

毎年二、三回、戸倉村から三里(約一二km)離れた青梅町で郡校長会が開かれた。足田は、校長会がとてもしやだつた。金のない足田は、わらじばきで山道を往復した。さらに、わずか三〇銭の会費がないため、会議の後で開かれる懇親会にさえ出られなかつた。その都度、何かの用事にかこつけ、懇親会への出席を体よく断った。その帰る途中、ニツ塚峠の頂上から星を見ながら、涙を流した。

『……其困苦中極点ニ達シタル一、ニヲ挙グレバ、不用物ヲ探ツテ売却シ、又ハ衣類ヲ典物シテ愚父ニ送金、或ハ米塩ニ代フルコト数マナリ。又本郡教育会(青梅町)ニ出ヅル毎二、ノウ中乏シキガタメ、懇親会ニ臨ムコト能ハ

てきた過去の仕事は小さい。だが、無意識ではなかつたと思うと、安心して死ねるような気がする」。

と言いつ残して。四八歳であつた。

明治三九年、戸倉村は模範村(優良自治体)として全国で紹介され、全国から二〇〇人以上もの人々が視察にきた。さらに、四三年には、時の内務大臣から表彰を受けた。

後年、足田の教育愛に徹した姿は、映画や本、雑誌で広く世に紹介された。また、足田を偲んで、現在も毎年九月二二日前後、戸倉小学校の児童は墓参りをしている。

『私は、生徒のことを思つてくれる先生が、一番いい先生だと思つています。だから、足田先生の話を聞いて、とてもいい先生だったんだなあと思ひました。ふつうの先生だったら、今まで伝えられないと思ひました(児童作文から)』。

足田の具体的な功績は何もない。ただ、「私は戸倉の土になる」と、ひたむきに働いただけである。しかし、子どもたちへの深い愛情と、人間教育によつて村全体を変えていった激しい情熱と努力は、「日本のベスタロッツチ」と呼ばれるにふさわしいものである。

【参考文献】

『村史 戸倉』

『日本のベスタロッツチ足田校長』

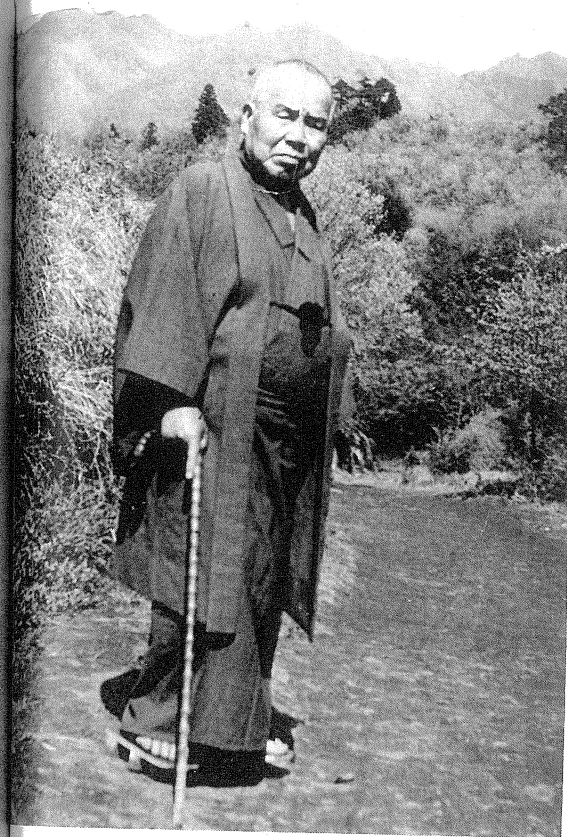
杉本栄一著(啓方閣版)

『戸倉物語』石井道郎著(けやき出版)

(東京都五日市町立小宮小学校教諭 出羽敏之)

村づくりの一生を捧ぐ 行動派の教育者

長谷川 一郎



教職をめざす

長谷川一郎は、明治一三年（一八八〇）二月一八日、津久井郡内郷村（現同郡相模湖町）に父茂平、母クマの長男として生まれた。父茂平は学務委員を務めたほどの学校教育に熱心な人だった。その影響を受けた一郎は尋常柳沢小学校（現相模湖町立内郷小学校）を卒業後、当時鎌倉町（現鎌倉市）にあった神奈川県師範学校に入学した。

明治三四年（一九〇一）三月、同師範学校を卒業した一郎は、津久井郡高等協心小学校（現同郡津久井町立中野小学校）訓導として教職の道についた。この学校で一年ほど教鞭をとったが翌三五年九月、生まれ故郷であり自らの出身小学校でもある内郷村の尋常高等

余りの山地に植樹できることとなった。

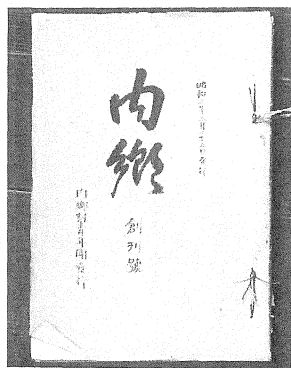
こうして児童、教員とともに、明治三九年、杉の苗三〇〇〇本を植付けたのを手はじめに以後二年間、一年も欠かさず杉、ひのき、松を毎年三〇〇〇本植えつづけた。枯れた木は補植し、ついに約六万本の成木となったのである。

六万本の植樹

内郷小学校の訓導となった。一郎は、以後この故郷内郷村を中心に、村づくり、人づくりに一生を捧げることになる。

そのころ、内郷小学校は、校舎は朽ち果て職員員の月給も期日に支払われず、日用品にさえ事欠く有様であった。付近の山々は荒れており、大雨による土砂崩れの心配さえあった。このような状況の中で、一郎は将来の学校運営を考慮し、また治山の重要性を考えて明治三六年、学校林を経営するための第一歩を踏み出した。まず高等科児童に杉の苗を育てさせることにした。いわば小学生に農業実習をさせたのである。

この杉の苗木も三年目になると植付苗に成長し、一郎は植樹する場所さがしを始めた。村の有力者に相談するが、「植林のような厄介な仕事は大人の我々が経営しても困難な仕事なのに、児童だけで実施するなんてどうてい不可能だ」という答えが返ってくるのみであった。しかし彼は失望せず、新しく村長になった宮崎基重に話を持ちかけた。一郎の熱心さに心を動かされた宮崎村長は、早速関係者と協議し、その結果、隣の日連村（現津久井郡藤野町日連地区）との境付近の二〇町歩（二ha）



内郷村青年会雑誌『内郷』

この間、苗木の仕立て、運搬、植付け、下草刈り（年二回）、枝打ち、間伐等はすべて児童と職員だけで行い、村民の助力は一切頼まなかったという。

児童たちの学校林管理作業は、大変つらかったようだ。現代と世相が異なるとはいえ、周囲の人々の理解を得て、この植林事業を成

体験的道德教育

長谷川一郎は、植林という息の長い仕事を児童に体験させたが、「親孝行」についても体験的教育を行っている。それは郷土内郷村が生んだ、当時の観念では理想的な婦人像ともいえる平井ハツの墓参であった。

平井ハツは、文政九年（一八二六）、内郷村に生まれた。一八歳の時、同村の治兵衛と結婚するが、苦しい生活の中で夫は病氣になり、懸命の看病にもかかわらず帰らぬ人となった。ハツが二二歳の時である。それから老父母を支え、二児を育て、農業に精を出すこと三〇年に及んだ。その働きぶりは明治二年（一八六九）には小田原藩から、同五年には足柄県庁から表彰されるほどであった。

子どもを夫の形見とし、夫の両親に仕えることを女の道と考える人であったのだろう。

一郎は、この平井ハツを郷土の誇りとし、毎月命日には全校生徒を伴って、墓参りを行った。このことについて大正時代に在学していたある老人は、「親孝行は大切なことだと

いうことがよくわかったような気がする」と思い出話の中で語っている。

ここにも一郎の、体験を重視した人づくりのありようがよく表れている。

青年会の結成

大正時代、全国的に小さな山村は貧しかったが、内郷村もその例外ではなかった。当時を知る人たちは「お弁当は、さつまいもだった」「貧乏もどん底で学校へ弁当を持っていけない子どもも多かった」「女の子は、四年生までは学校にいくが、五、六年になると、働きに出てずいぶん減った。男子も年季奉公に出された」と口々に語っている。

校長であった長谷川一郎は、このような状況の中で青年を村にとめておくため、青年団を結成しようと考えた。

内郷村は、神奈川県下でも比較的早く、明治三六年（一九〇三）村立実業学校を設立し、農業補習教育を開始したが、一郎はこれら補習学校生徒を中心に明治四三年、内郷村青年会を組織した。会員は一五歳以上三〇歳以下の男子であった。青年会は会員の共同事業から生じる収入によって運営し、主な活動は図書閲覧所の設置、道路補修工事、小学校校庭等の維持管理、水田への稲の植付け、農産物品評会の開催、篤行者の表彰など多岐にわたった。



寸沢嵐石器時代住居跡

た。大正五年（一九一六）には近隣の村々にも結成された青年会と共同して津久井郡北部連合青年会大運動会を開催するまで発展し、一郎はその主催者の中心となって活躍している。彼の創立した青年会が発端となって、内郷村はもとより近隣の地域の活性化や人づくりに大きく貢献したたろうことは想像に難くない。一郎は、大正一三年には二〇余年にわたって勤務した内郷小学校を去っているが、このとき、彼は「やるべきことはすべてやった」と述懐している。

遺跡の発見と保存

産業教育に強い興味を持っていた一郎は、津久井郡実業学校で再び教鞭をとることになった。当時津久井郡は養蚕農家が九割を占める、養蚕が盛んな所であった。この学校は養蚕の技術の修得や改良のため、明治三五年（一九〇二）に開校されているが、彼は、この学校に在職していた間、地域の歴史に関心を持つようになっていた。彼の大きな業績の一つに旧石器時代の住居遺跡の発見とその保存がある。昭和三年七月、内郷村寸沢嵐地内に約三〇〇年前の住居跡を発見、近所の青年たちの協力を得て発掘調査を行った。

翌昭和四年、一郎は推されて内郷村村長

（昭和二年まで）になっているが、このときの遺跡の保存に大きく貢献している。寸沢嵐遺跡について詳しく文部省に報告し、昭和五年十一月、文部大臣の指定する寸沢嵐石器遺跡保存施設となった。

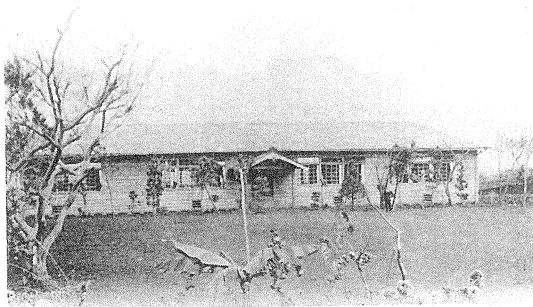
また、村長時代、民俗学者柳田国男が内郷村に村落調査に来村しているが、このころから民俗、考古学の研究にも意を注ぐようになっていく。

村長時代、森林組合の設立や、当時としてはめずらしい観光事業に力を入れるなど産業の振興を図り、村づくりに尽力するなど、行政職としてもその才能を発揮している。

学校林で中学校を建設

終戦後、学制改革で六・三制が施行され、各市町村では新しく中学校を建築することになった。それは疲弊した終戦直後のことでもあり、多くの町村では大きな悩みとなっていた。しかし、津久井郡内郷村は困らなかった。およそ四〇数年前、児童たちが植付けた学校林が役に立ったのである。内郷小学校の学校林は、戦時中の供出のため再三伐採した後であったが、新中学校建設資金およそ六〇〇万円をねん出しうる樹林が残っていた。

昭和二十四年（一九四九）四月、上棟式に臨



当時の内郷小学校

んだ村の有力者は「子どものとき、学校で植付けた杉の苗が生成して、自分の子孫の教育のための校舎建築に役立つとは、まったく夢のようだ」と語り、半世紀も前の一郎の業績を称賛したという。

この学校林による新制中学校校舎建築の話は、ラジオ、新聞等で全国に報道された。

一郎は、これらの功績により、昭和二五年林野庁長官から、また、神奈川県知事からも表彰されている。

長谷川一郎は、生まれ故郷の美しい山村で村づくり、人づくりのため、常に先頭に立ち活動し、実践した。その意味で一郎は、理論よりも行動で教育を実践するタイプの教育者であった。学校林の経営、墓参による德育、青年会の結成、遺跡の発見、そして自ら育てた学校林で新制中学校を建築するなど極めて多彩な活動を通して、「村治は教育家」と実感した彼の生涯は、「郷土に生きる教育家」として、将来に語りつがれていくに違いない。

昭和三九年（一九六四）没、享年八五歳

【参考文献】

- 創立百周年記念誌刊行委員会『内郷小学校百年のあゆみ』
- 津久井町郷土誌編集委員会『津久井郡青年団史』
- 長谷川一郎『学校林を語る』
- 津久井郡勢誌刊行委員会『津久井郡勢誌』
- 神奈川県『神奈川県統計書』
- （神奈川県立文化資料館 永野勝康）